

第 11 卷

戒 叢

SEIJU

1988 冬 号



横浜 善光寺刊

拜啓今季も又師走と迫るるの節
節と相成り皆様にはなぐりとお
お忙しうもお察あつたります

「成寿」第9号もお送りいたす
今回のほ少し堅い内容となりしが
これは有英舎の事也承がよよ
先客へもまたあらわしとお念ひの上
お讀みいただきは幸甚です
末弟から皆様の健康も
祈念して様事つたります 合掌

昭和十三年十二月五日

山崎とまは 黒田武志
(大園)

檀信徒の皆様

仏陀

こは安穩の

よりどころにはあらず

こはすぐれたる

歸依にもあらず

かかるところに

歸依するとも

すべてのくるしみを

のがるることなし

〈法句經〉

第 11 卷

森 新

SEIJU

1988 冬号



中国の仏

慈眼^{じげん}を以つて
一切衆生を視^みそなわす

善光寺蔵



中国の仏

慈眼^{じげん}を以って

一切衆生を視^みそなわす

善光寺蔵





第三回 海外留学僧派遣育英会総会



第三回 海外留学僧派遣育英会総会





育英会開かる。



善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理
事長、事務局〓横浜市港南区日野町二六〇四、
善光寺内）の第三回総会が8月23日午後1時
から善光寺で開かれ、新たに決定した昭和63
年度の第4期留学僧5人に辞令と助成金が手
渡された。この日は留学僧のOBや関係者ら
が各地から集まり、同育英会理事の駒沢女子
短期大学教授・東隆真氏による善光寺育英会
の将来についての講演も行なわれた。

本文より



辞令交付

第三回 日仏セミナー―善光寺参拝記念茶会



日本で開催された第三回日仏セミナー御出席の方々が十月二日、善光寺を拝登されました。

参拝のあと、用意された茶席で薄茶を賞味され、古式豊かな“ティーセレモニー”を興味深く満喫されたようです。

折からの小雨もむしろ趣きを深め、参拝に先立って見学された三溪園の風景も、障子の外に引き寄せられたような、しっとりとしたひとときでした。

テレビ東京「比叡の光」に出演



十月二日と八日の両日、早朝五時四十五分より十二チャンネルで放映の「比叡の光」に当山住職が出演しました。

この番組は天台宗本山である比叡山が独自に持つワクで、各界からの有名人を起用してかくれた人気を保っています。

放映に先立って、九月に収録が行われましたが、比叡山関係者やTV局側から、実にユニークだとの評価をいただきました。

前半に於ては、海外留学僧派遣育英会を中心とした人づくりについて、後半では外国での修行体験やタイの得度式について、世界に目を向けた教化を熱っぽく語りました。感極まって涙するシーンもあり、住職の手柄がよく撮られた番組でした。

水に生きる

チャオ・プラヤ川の支流

早朝、この川は水上マーケットとなる。

果物、日用品、軽い朝食などを売る舟がせめぎ合い、流れる市場は九時頃までにぎわう。

ワット・パクナムもまた、こうした川のほとりに建っている。

〈ワット・パクナム副住職を見舞った折に〉



水に生きる

チャオ・プラヤ川の支流

早朝、この川は水上マーケットとなる。

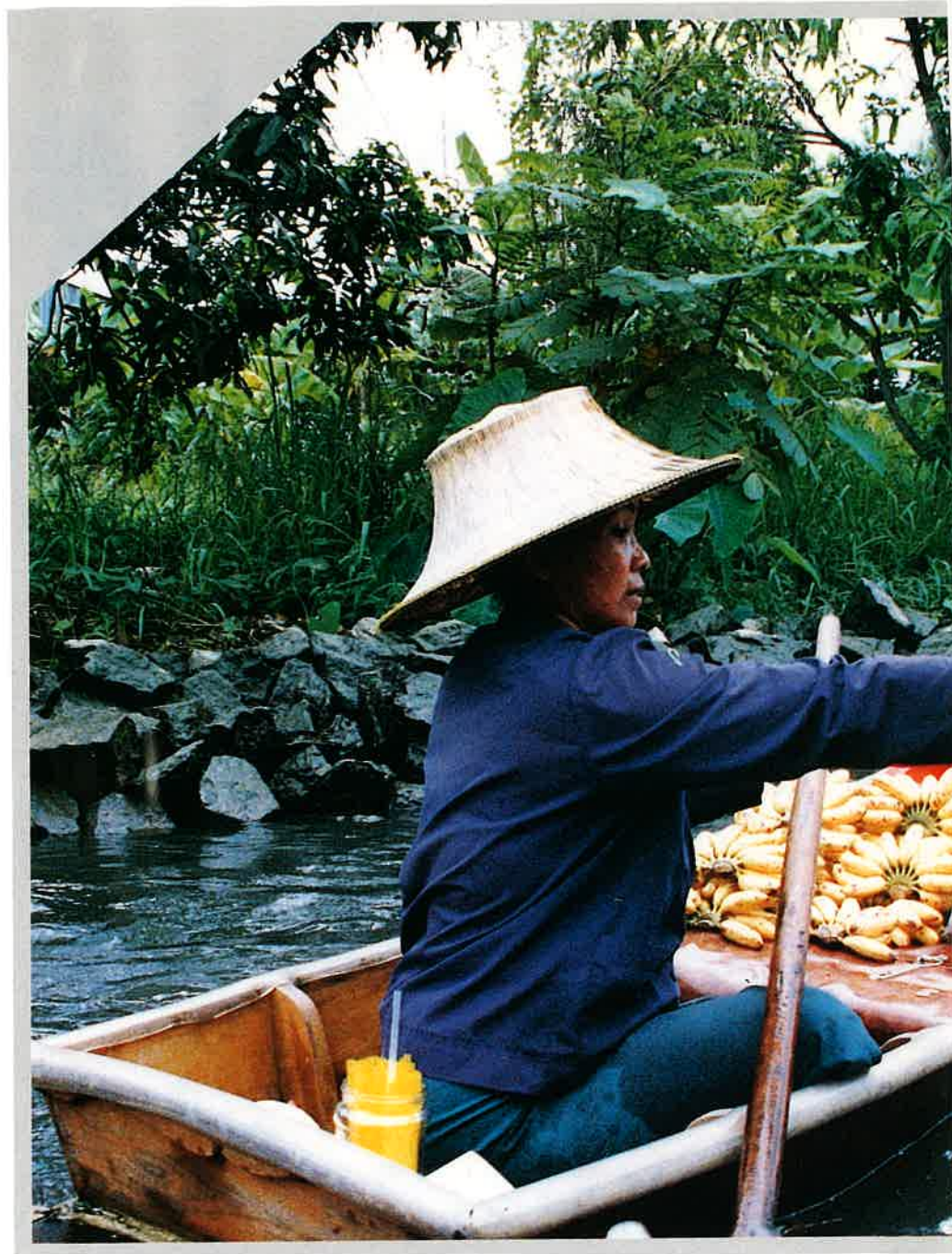
果物、日用品、軽い朝食などを売る舟がせめぎ合い、流れる市場は九時頃までにぎわう。

ワット・パクナムもまた、こうした川のほとりに建っている。

ヘワット・パクナム副住職を見舞った折に



倫子夫人 撮影



道行

法句經



これぞひとの
 知見をも淨むる道
 かのほかに道なき
 誘惑者も
 誘惑者も
 この道は
 誘惑者も
 誘惑者も



魂の聖火台

赤間義徳

“釈尊の教法宣布のため

宗派を超えて

人を作り 人を育てよう”

大誓願が

方丈様の魂に点火し

炎となって燃えさかっている。

“平和の祭典として

古代オリンピックの復活”



クーベルタンの夢が

ソウル・五輪スタジアムの聖火台に
燃えているように。

われら檀信徒は

浄信を合わせてひとつになり

大誓願成就の火を燃やそう。

五輪の聖火は四年に一度だが

二十一世紀を仏法の世紀とするため

地球スタジアムの魂の聖火台に大誓願の炎は
燃えつづけなければならぬからだ。

この心術 懈倦げけんすることなかれ

身分不相応とも思える大誓願に燃え、昭和五十九年一月十五日、善光寺海外留学僧派遣育英会を設立し、翌年に第一次留学僧として田中・梅田の両君をタイ国のワット・パクナムに派遣しました。このときは、薄氷を踏むの思いで今口に及んだことも事実であります。それだけに、ひと口食べ物を減らしてまで私の大誓願を支えてくださる檀徒の方々に満腔の謝意を表するものであります。

去る八月二十二日、第二回総会を開きましたが、その席上、前記梅田兄が「第一回総会ときは私ども一人だけでさびしかつたですが、今回は大勢でたいへん力強く思いました」といみじくも漏らしておりましたが、総会も回を重ねること三回にして、今や十七人を八ヶ国に派遣するという成果を報告し得ております。「中外日報」は「異教徒からも高い評価」という見出しのもとに第二回総会の意義を大きく取り上げ高く評価して下さいております。

そして總會終わって三日後、佐藤老師と共にアメリカに渡り、
スアンゼルスサンフランシスコの禅センター山の道場に赴き、十四ヶ国六十数名の修
行者と共に九旬安居の并道にはげむ岩波君の元気な姿に接し、つい
でニューヨークにおいては、前角老師の高弟□バート・グラスマン・
徹玄師のもとで精進している越石君に辞令を交付してまいりまし
た。島崎君は、徹玄師の法弟デニス・メルツエル・玄法師と共にポ
ーランドに行っておりますので会えませんでした。この旅を通じ
て、人材育成の重要性を痛感いたし、今後一層の努力精進をと心に
銘じております。

ねがわくは、われ一切衆生と、今生より乃至生生をつくして、正
法をきくことあらんとき、正法を疑著せじ、不信なるべからず。ま
さに正法にあはんとき、世情をすてて仏法を受持せん。ついに大地
有情ともに成道することをえん。

かへのごとく発願せば、おのずから正発心の因縁ならん。この心
術、懈怠げけんすることなかれ。『正法眼蔵』「谿声山色」

特集 ●海外留学僧派遣育英会の将来について……………東 隆眞

●四年間で計十七人に……………26

エッセイ ●バンコックの僧院生活……………黒田 武志

●いのちの尊さ……………吉田 雄鳳

留学記 ●博士論文の完成から出版まで……………阿部 慈園

●闇に生氣湧くインド……………保坂 俊司

●インドの家族……………清水 晶子

連載 ●禅と衣食住(6)お茶は葉……………東 隆眞

論文 ●二十一世紀の仏教と私の役割……………星宮 智光

●中道実践の「正」観に関する一考察……………洪 淳海

●トウドンと供養の旅……………洪井 修

●禅の国際化と私の役割り……………バシュー・ルース 淨信

●21世紀の仏教と私の役割り……………森 雅秀

レポート ●良寛様の生き方から思い付いたこと……………李 幼麟

●さよならの箱……………山本 櫻子

詩 ●善光寺だより……………92

●読者からのお便り……………96

題字・グラビア・さし絵

グラビア撮影

伊藤三喜庵

五十嵐千彦

カット

古刷仏集より

海外留学僧派遣育英会の将来について

海外留学僧派遣育英会理事 東 隆 眞

海外留学僧派遣育英会第三回総会にあたり、特に育英生の皆様に親しくお目にかかれるのは、私のよろこびとするところでございます。

昭和五十九年一月十五日に、善光寺住職黒田大圓老師が、善光寺開創十五周年を記念して開設なされまして、本年度五周年を迎えることになったわけです。

ただ今、十七名の留學生がいらっしゃるわけですが、黒田老師は、わが日本が世界で一番大

きな仏教国でありながら、仏教界は残念ながら国際化に対応する能力に欠けている。ここに、海外生活を通して広く世界に目をむける人材の育成にとめたい、というのが、これをおはじめになった理由のひとつでございました。いまひとつは、特に日本仏教の場合は宗派仏教という色彩が強いのですが、宗派はそれぞれ違いますが、その宗祖を通じて仏教の開祖である釈尊に還るといふことから、仏教を学ぶ方々の中

で、将来性のある人物に、仏教興隆、国家の進運、更には世界人類の平和に寄与していただきたい、そのためにいささかなりともお役に立ちたい、というのが、黒田老師のおはじめになりました育英会設立の趣旨であろうかと、私は受けとめております。

私は全く、無力無能であります、幸い大学、大学院時代の同窓というご縁があつて、声をかけていただきましたので、私は黒田老師の応援団のひとりというつもりで、理事の末席を汚させていただいているわけでございます。

こういうご縁をいただきまして、ここにこうして皆様方と同席させていただきますことを、大変光栄に思っております。

さて、ここで、この育英会のことどもについて、私が感じておりますことを三つばかり申し上げたいと思つてございます。

ひとつは、五周年を迎えた育英会が、最近、

内外から注目されるようになりました。新聞雑誌も取り上げてくれるようになりました。特に中外日報（日本最大の仏教日刊紙）は、全面的に、無条件に会の育成ということについて、側面からのご協力をいただいております。こういう会があるということを広く知らせてくれるわけです。多くの方が、この会の存在を知っていただいて、この会を活用なさる方が、一人でも二人でもふえていただくことができれば、大変ありがたいことだと感ずるのであります。

この育英会は、一カ寺で運営されていきます。この財源というのは、そういう言い方が妥当かどうかわかりませんが、黒田老師のいわゆるポケットマネー。それから有志の方々の寄付金。そして一番大きな財源が、善光寺檀信徒の方々のご協力であることと、私は感じております。

黒田老師は、一食に一口のごはんを節約して善光寺に寄せてほしい、それで育英会を運営し



たいと檀信徒の方々に呼びかけられたわけ
です。塵も積もれば山となるのたとえどおり、そ
れが大きな力になっていたのでございます。

どんなことでもそうですが、何かひとつのこ
とをはじめるといふのはなかなか大変なこと
でございます。どんな良いことをはじめても、だ
からといってそれが思うように運ぶものではあ
りません。賛成する方もあれば誹謗ひぼう中傷する方
もあります。しかしながら、善光寺の檀信徒の
方々は、その点よくご協力をしてくださってい
ると感心している次第でございます。

そんなことで、この五周年を迎えたわけでご
ざいますが、ここで中外日報の記事をご紹介します
たいと存じます。

私は、曹洞宗宗務庁から出ている曹洞宗の機
関誌「曹洞宗報」に、足かけ五年ばかり「誓願
に生きる人々」というテーマで、ずっと連載を
してまいりました。現在校正中で、二百ページ

あまりの単行本になろうかと思いません。この本のあと書きに、この育英会の事を記しておいたのではありませんが、昭和六十二年十二月に、宗教とアジア社会セミナー、これは、上智大学のアジア文化研究所と、パリ第七大学の共催ということで、フランスのパリ第一大学で開かれました。日本の仏教界を代表しまして、黒田老師は、新しい教化路線を求めて「十五年の軌跡とその成果」というテーマで、ユニークな善光寺の教化と運営について報告されまして、強い関心を集めました。上智大学アジア文化研究所の石澤所長さんのお話によりますと、日本の仏教界から黒田老師を特に指名したが、これが今回のセミナーの目玉となったという事を、中外日報の昭和六十二年十二月十二日付で書いておられます。

先ほど申しましたように、中外日報が、全面的に無条件のご協力をいただいて、ご発表下さ

ったわけですけど、この記事をご覧になりまして、上智大学の安斉伸教授が、自分は仏教徒ではないがと前置きして、黒田老師の寺院経営は、第二バチカン公会議以後、現代のカトリック教会が目指しながらなかなか実現できないているのに、これを、理念的にも実践的にも先取りをしたその業績を高く評価しなければならぬといっておられます。これは昭和六十二年十二月二十三日付の中外日報への安斉教授の寄稿です。教授は、寺院も教会も、黒田師の情熱ある宗教者の養成と、海外派遣の実践をも含めて、黒田師の理念と実践の前に自己の姿を映し出してほしいものと願うと結んでおられます。

安斉教授は、宗門外のお方でございます。宗門の外の眼の具わった方の高い評価を得たという事に、私は感銘しました。そこで、やがて上梓する拙書のと書きに紹介させていただいたというわけでございます。

こういうことで、世界的な観点から注目され、評価されつつあるということを、私どもは、五周年を迎えたいま、こころして受けとめなければならぬと存じます。

二番目に申し上げたいのは、二人の仏教僧のことでございます。

ひとり、明治時代に、浄土真宗、東本願寺の方で小栗栖香頂という方がいらつしやいま



す。それから、十数年前に亡くなりましたが私の恩師でもあります小川弘貫という先生のことです。この二人の方のお考えをご紹介します。

はじめに小栗栖香頂という方ですが、この方は明治六年（十年頃）にかけて東本願寺の派遣僧という形で、東本願寺の上海別院の総督をつとめました。そうして、上海で著書をあらわしたり、幼稚園や小学校を作りました。特に、この小学校はのちの上海日本人学校のはじまりだということですが、また、「喇嘛教沿革」とか「北京護法論」といった著書をあらわしまして、大いに気炎を吐いて、当時の仏教革新運動を目指したわけですが、こういうことを言っています。

明治時代というのは文明開化、廃仏棄釈、そういうことを頭に入れて考えなければならぬのですが、インドと中国と日本、この三国の仏教同盟を設立させました。仏教による全アジア

民族の提携ということを考えて、これを当時の中国の日本人僧・中国人僧に話しかけるのですが、なかなか賛同を得られなかつたようです。

更には、世界各国に仏教の教会を立てて、仏教を宣伝したいと努力されたのですが、賛同を得られないまま明治の中頃、病を得て亡くなったのであります。しかしながら、この方の遺志は、中国の大虚法師に受け継がれて、当時中国にも廃仏棄釈があつたのですが、これに敢然と抗しまして、中国仏学会を結成されました。そして「中国仏教」「海潮音」「現代僧伽」という雑誌を刊行しました。武昌という所に仏学院も作られました。

そして、仏教による三民主義（三仏主義）というものをとなえられまして、中国革命はそれによって完成する、更には仏教の世界的発展を期するということ、同時に墮眠をむさぼっている中国僧の腐敗と墮落を糾弾しまして、大いに

努力なされたのですが、これは小栗栖香頂さんの遺志と理想をついでいると見られているわけです。特に注目しますのは、インド・中国・日本の三国仏教同盟ということですよ（道端良秀著『日中仏教友好二千年史』）。

私の先生でありました小川弘貫という方ですが、曹洞宗の方で、唯識の学者でもありました。第二次大戦中は広東に出征されていたのですが、先生の自慢話のひとつは、一度として敵（中国人）に刀を抜いたり鉄砲を向けたりしたことはなかったそうです。

先生が授業でおっしゃったことは、これから、インドと中国と日本が団結して仏教精神を発揮すれば、世界の平和はやってくる、君たちはそのつもりで頑張ってほしいということでありました。

これは、さきの小栗栖香頂さんのお考えと似ているようにも思えますが、ちよつとちがうと

思います。仏教精神とは、私は、和合の原理だと思えます。相手を倒したり、相手と対立することではなく、相手を認める、対手を容れる、相手と仲良くする。闘争するのではなく、お互いに相手を容れるということです。幸い、インド・中国・日本の仏教は和合の精神でやってきたし、これが一番理想だということであろうと思えます。

特に、二十一世紀は、日本では、宗教の時代だとか心の時代だとか言われておりますが、宗教が対立抗争の原因となるようなことがあつてはならないと思えます。

心の時代とはいいますが、物に対する心、物質に対する精神というような解釈ではなく、物と心の調和でなくてはならないと思うのです。

いずれにしてもこれまでの仏教は、あまりにも口先だけで唱えてきたところが多かったのではないのでしょうか。二十一世紀に向けて我々は、

誓願を持って、お互いに、世界平和のために行
動し実践していかなくてはならないんじゃない
か。

最後に申し上げたいことは、私の個人的な希
望でありますが、育英会というご縁で、私たち
はここにこうして集まっているわけでありま
す。まず、育英生の方々は仲良くしていただき
たい。おたがいに、連絡を充分に取り合い、良
い刺激をつくりあって、学問、信仰、いろいろ
な面において協力し合い、月並みな言い方にな
りますが、世のため人のために尽くしていただ
きたい。育英会は、まだはじまったばかりです
が、皆さまは、育英会の最初期の方々でありま
すから、やがて、先輩というか、ご先祖という
か、そういう位置に立たれるのであります。そ
こで、後続する後輩たちのために新しい道を切
り開いていただきたいと願っております。



第三回 海外留学僧派遣育英会総会





四年間で計十七人に

善光寺海外留学
僧派遣育英会

第三回総会開く

善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局＝横浜市港南区日野町1604、善光寺内）の第3回総会が8月23日午後1時から善光寺で開かれ、新たに決定した昭和63年度の第4期留学僧5人に辞令と助成金が手渡された。この日は留学僧のOBや関係者らが各地から集まり、同育英会理事の駒沢女子短期大学教授・東隆眞氏による善光寺育英会の将来についての講演も行なわれた。

異教徒からも高い評価

同育英会は、これまでに六十年代・第一期〓二人、六十一年度・第二期〓四人、六十二年度・第三期〓六人の計十二人を留学僧として採用、タイ、アメリカ、インド、スリランカ、日本（海外からの留学）の各地へ派遣し、育英基金を給付してきた。

今回、第四期留学僧として当初

四人を決定、その後、一人を追加し、計五人が総会の席上発表された。追加されたのは名古屋大学大学院博士課程に在学中の森雅秀氏(二二六)で、インド・チベット仏教の儀礼面の研究をさらに深めるためロンドン大学東洋アフリカ学院の学位取得コースへの入学を許可され、十月からイギリスに留学する。これにより留学僧は合計十七人になった。

総会に先だつて、善光寺の「釈迦殿」で本尊上供が営まれた。はじめに佐藤俊明常務理事(千葉県・曹洞宗龍光寺住職)が経過報告を兼ねて挨拶し、「石の上にも三年」というが、発足以来四年でよう

やくこの育英会も内外から注目され、評価されてきた。責務のますます重いことを痛感する」と述べた。

導師の黒田理事長が本尊に拈香し、法語を唱え、参加者全員で般若心経を誦した。引き続き辞令伝達が行なわれ、まだ日本にてこの日参加した星宮智光氏とバシュー・ルース浄信さんの二人の留学僧に辞令と助成金が黒田理事長から手渡された。

記念撮影の後、一階の客殿で東隆眞氏が講演し、善光寺の育英事業について客観的な評価を引きながら、その歴史的意義に言及。黒田理事長の誓願により設立された

育英会が「世界的観点から、異教徒(キリスト教)の人からも高く評価されていることを肝に銘じなければならぬ」と述べた。

また「心の時代と言われるが、物質に対する精神というような理解であつてはならない。物と心の調和による『こころ』でなくてはならない。二十一世紀に向けて、互いに誓願を持って生きていかなければならないのではないか」と語り、「育英会の助成により世界で学んだ留学生たちが共に協力し、世のため人のために尽くすとともに、後輩の人々のために新しい道を開いてほしい」と期待の言葉を贈った。

この後、黒田理事長が挨拶し、「私はいま五十歳なので、あと十年は育英会にお尽くししたい。還暦までには留学僧は七、八十人になるだろう。やせ我慢をしているが、世のため人のため、そして釈尊のために、やらせていただきました」と述べた。

総会では新美昌道事務局長（東京都・曹洞宗福嚴寺住職）が現況を説明し、タイに山田長政の供養塔を建立する計画や善光寺開創二十周年記念事業について報告され、留学僧の体験をどう生かすか、また何をなすかについての原稿を善光寺の機関誌に掲載していくことなどを決めた。



育英会開かる。



善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局〓横浜市港南区日野町二六〇四、善光寺内）の第三回総会が8月23日午後1時から善光寺で開かれ、新たに決定した昭和63年度の第4期留学僧5人に辞令と助成金が手渡された。この日は留学僧のOBや関係者らが各地から集まり、同育英会理事の駒沢女子短期大学教授・東隆真氏による善光寺育英会の将来についての講演も行なわれた。

本文より



バンコックの僧院生活

住職 黒田 武志

(大圓)

バンコックの街には、チャオ・プラヤ川という大きな河が横たわりその支流は縦横に走っている。支流とはいえ満々とした流れで、人々もまた川を棲み家としている。高いマンゴーの林を背にしなから、川にへばりつくように人家が並んでいる。何故安定した土の上に居を構えないのだろうか、疑問に思うが、家の半分は土とつながり、半分は川に委ねる、そんな生活が一番安定しているのかもしれない。茶色の濁流で食器を洗い、衣類を洗い、歯も磨けば身体も

洗う。この濁流の上を何十艘もの舟が、せめぎ合いながら水上を行き交い、食料品や日用品を売っている。おかゆやめん類の朝食も、この舟の上で作って売っている。まるで動く市場といつてよいだろう。水は空気のように人間と関わっている。

私が修行したワット・パクナム寺院もそんな川べりに建っている。

街の雑踏から道を折れてわずかばかり入ると、いつの間にか、いくつもの堂宇が建ち並ぶ

広大な寺院の中に立っている。

仏教国であるタイでは、94%が仏教徒である。そしてタイの仏教は、極めて戒律の厳しい上座部仏教（小乗仏教）で、タイの男子は一度は仏門に入る習慣があり、国王も貴族もみなその習慣に従い、仏門に入らない男子は一人前の男子として扱われない。

黄衣をまとった僧侶は、社会的にも尊敬される地位にあり、冠婚葬祭すべての儀式を司って

いる。

仏教寺院は、タイ全土に二万五千以上もあると言われている。

今やバンコックは近代化され、国籍不明の都市といった、どこの国にもあるようなコンクリートのかたまりになっているが、その中で天に突きささるような独特な建築の寺院群は、その存在をしっかりと誇り高く際立ってそびえ立っている。



郊外の農林地帯に出たとき、何かきらめくものが見えたら、それは決まって寺院である。金と緑と赤で荘厳された建物は、高く光を放つことで、人々に“心の拠り処はここに在る”と教えてくれているかのようである。

ワット・パクナムは修行の僧堂でもある。

僧院の朝は早い。それは日本と同様であろう。修行僧は、小鳥の声を聞きながら街へ托鉢に出る。街のあちこちでは食べ物を捧げる人たちが待っている。僧侶は黙ってその供養を受けても、決して礼を述べたり頭を下げたりすることはない。超然とただ受けるだけである。

托鉢が終わって僧房に戻って朝食がすむと、朝の勤行が始まる。約一時間近く読経するのだが、日本の読経は荘厳ではあるが暗さをとぎとして感じる講し方に較べて、不思議に美しいそしてやわらかな響きをもっている。

読経のあとは自分の僧房に帰って勉強するこ

とになっている。タイ語が充分でない私にとって、タイ人の先輩僧から教わる様々な戒律についての勉強は苦しかった。

上座部仏教においては、昼の十二時を過ぎると水以外の一切の食物を摂ることは許されない。厳格な「非常非食戒」によるものである。

これに慣れるには時間もかかったが、慣れてしまえばむしろ快適でさえあった。血液と消化の関係から午後食事を摂らないことで一切の力を脳に集中させることになる。經典を覚えることと瞑想することが午後の時間のすべてといっているだろうか。

夜の七時から九時までは瞑想の時間で、これがすめば日課は終わり眠ることだが、高いベツトや綿の入った布団を使うことは戒律で禁じられている。木の床にゴザを敷き衣と同じような黄色の布をひろげて眠るのだが、疲れた頭を休めるには場所は選ばない。

二二七の戒律を守ることは、それだけでも厳しい行である。生活の細部にわたって厳しく律するものであるが、例えば托鉢の際も外に目をやらず鉢の中を見て供養を受くべし、食べる時も鉢の中をよく見ること、ご飯とおかずを丁度いい様に食べることなど実に細々と決められていて覚えるだけでも大変である。

女人に対しての戒律も厳しく、女人に触れるとそれ迄の修行が無に帰するとされていることからタイの女性は決してある距離以上は僧侶に近寄らない。衣に触れることさえタブーである。

食事の供養を受けるときは、テーブルに食べ物が入った器をじかに並べるのではなく、飲み物でも料理でも施主の手から僧侶の手に渡されてはじめてテーブルに置く。些細なことのようには思われるかもしれないが、ひとつひとつ深い意味に裏打ちされているからこそ、行となるのである。

テーラワーダ仏教は、戒律仏教といわれるほど、その信仰の実践において戒律が重要視される。タイの人々が僧侶を敬うのは、この厳しい規律に身を投げ入れ、実践していることに対する尊敬でもあるのだろう。タイ語を充分理解することはできなくても先輩僧の一挙手一投足のすべてが私にとっては教えであった。



●不動明王大祭法話

△いのちの尊さ▽

今ご紹介いただきました吉田ゆうほうです。
まだ頭を剃って五年半という、先輩方と比べると赤子のようなものでございますが、よろしく
お願いいたします。

私自身、ずっと善光寺で法を説くのを願っており
ましたが、今日ここでみなさま方とお会い
できたのも、ありがたいご縁であると思ひ感謝
しております。

道元禅師は、人間命分あり、福分あり、食分
ありとおっしゃっておられます。人間は生まれ

鎌倉市長谷寺顧問
佛画教室半徳会主宰

吉田雄鳳

ながらにして、また生活環境によって価値観が
ちがうものでございます。一番大切なものは何
か、と聞かれたとき、お金や地位という人もい
るかもしれませんが。しかし、一番大切なものは
命でありましょう。頭を剃ってからまだ日も浅
い私であります。私なりに仏教を見、釈尊は
我々に何を教えたのかということを考え
てまいりました。オギャーと生まれてから涅槃
に至るまでの命、この一番尊い命をどう生かし
ていったらよいのか、をお経に説いておられる

と思うんです。

道元禅師の正法眼蔵も、命の尊さを示したものであります。修証義第一章第二節のお言葉に示されているように、「人身にんしんうるること難し、仏法ぶつぽうおうことまれなり、今われら宿善しゆくぜんのたすくるに よりてすでに受け難き人身を受けたるのみにあらず、あいがたき仏法にあいたてまつれり」と

お教え下さっております。人間としては仲々生まれてこれない。さらに仏法にふれることができたのはもつとありがたいことである。というわけです。

法句経というお経にも「人の生しやうをうくるは難くやがて死すべきものの今命あるは有り難し。正法しやうぽうを耳にするは難く諸仏の世にいずるも有



り難し」という一句がございます。

釈尊が弟子のアーナンダと諸国を旅していたある日、ガンジスのほとりにやって来ました。

その時仏陀は、「アーナンダよ、河原の砂を手いっばいすくってみなさい」といわれました。そして手にすくった砂をごらんになった釈尊は、「そなたが持っている砂の数と地球全体の砂とどちらが多いか」とアーナンダに問われたのです。アーナンダが「もちろん地球全体の砂に決まっています」と答えると、釈尊は「地球全体の砂の数を諸々の達の命と考えたとき、人間として生まれてくるのは、そのひと握りの砂にすぎないのだ。」と言われました。「ではアーナンダよ、その砂を爪の上のせてみなさい」と言われましたのでアーナンダはなるべくたくさん砂を爪の上に乗せようと思いました。ほんの少ししか爪の上には残りませんでした。それを見て釈尊は、「アーナンダよ、爪上そうじょうの砂こ

そ、仏法に会える人の数だ」とおっしゃったと
いいます。人身うること難し、仏法おうことま
れなり、仏の法にふれることはまことに有り難
いことなのであります。

阿含経にも、盲亀もうきふぼ浮木のたとえとあるように、
目の不自由な亀が、一〇〇年に一度大海原の底
から海面に上がって来るときに、たまたま浮い
ている木の穴に首を突っこんでしまうという、
本当にまれであることのたとえなのですが、そ
れぐらい、人間として生まれてくることは尊く
有り難いものです。この尊い命をあずかった私
達は、やはり尊い生き方をしなければなりません。

杭州の刺史（知事）をしていた白樂天は、秦しん
望山ぼうざんの道林禪師（木の上で坐禪をしているので
鳥窠ちようか和尚とも言う）より、『諸悪莫作 衆善奉行
自淨其意 是諸佛教』の生き方をしなければい
けないと教えられました。白樂天は、そんなこ

とは三歳の子供でも知っていることではありませんかと質き返したとき、道林禪師は「三歳の子供でも知っているが、実行するとなると八十歳の老人でも難しい」と教えられました。さすがの白樂天も頭を下げるしかなかったと聞かされたことがあります。

お釈迦様の悟りとは、縁の悟りであります。

彼生ずるによりて我生ずる

彼あるによりて我あり

彼滅するによりて我滅す

そして一切衆生に仏性あり、ということですが。例えゴキブリでも仏性があるのです。では殺すべきか殺さざるべきか、というとき、それは「殺さざるを得ん」のですが、その時に、ゴキブリは役立たずだから殺していいとは思わないでほしい。いじめもわかりです。いじめをする子供を我々大人がいじめめるのでは、顔についた墨汁を墨で洗うと同じことになってしまふ。いじめ

つ子にもいじめられる子にも、仏性あり、とするそこから解決が生まれるのでしよう。

蚊も、仏性をもった生きものと考えると、殺しても当然という考えはなくなるはずで、その仏性をもったさまざまな命が、縁によって、いま生かされている。この命の尊さ、有り難さを今こそ感じなければならぬ時ではないでしょうか。



博士論文の 完成から出版まで



東方学院講師
駒沢大学講師
阿部 慈 園

1

ババット・ゴーカーレー両先生のお手伝いをしてしながら、南方上座部の教理綱要書である『清浄道論』(特に戒と頭陀)に関する論文を、ババット先生のご指導のもとに、まとめる毎日がつづきました。

しかし、八十歳を越えられた先生はときどき眼の痛みをうったえられました。眼がぐるぐるまわるともいわれました。一ヶ月、二ヶ月とわ

たくしへの指導がストップすることもありました。そのようなときは、息ぬきとばかり、北へ南へとインド国内を旅したものでした。

そして、渡印からほぼ三ヶ年を満たす一九七七(昭和五二)年の末ころ、先生は、

「ミスター・アベ、君のここでの研究はほぼ終わりに近づいたから、一時帰国して、日本で論文をまとめることにしなさい」といわれました。

帰国の準備に一ヶ月半くらいを要し、翌七八



年二月なつかしいプーナの地を後にしました。途中、研究資料のある、タイ国バンコックの国立図書館（ナショナル・ライブラリー）で、約二ヶ月調べものをし、同年三月三〇日羽田空港に降りたちました。

東京大学大学院博士課程（印度哲学科）に復

学して、両親のいる大宮の寺（興徳寺）でプーナ大学に提出する博士論文作成のための日々がつづきました。

留学以前に、博士課程における単位はほとんど履修してしまいましたので、週一回だけ大学院の講義に足を運ぶことになりました。同期のものは、すべて学外に去っていました。気がついてみますと、わたくしは博士課程六年目（D6）^{デイラク}だったのです。三、四年若い後輩たちと机を並べることに、少しく気ははずかしさを覚えながら、講義のノートを取った日々を、今はなつかしく思い出します。

約一年間を費して、わたくしの論文は、不備の箇所を多々蔵しつつも、完成しました。英文部分は、アメリカからの留学生クック・エドガー君にネイティブ・チェックしてもらいました。完成をあたたく見守ってくれた父と母は、わがことのように喜んでくれました。

一九七九（昭和五四）年二月一八日、論文のオリジナルとコピー五部を携えて、一路インドに向けて成田の空を飛びたちました。

さて、いよいよ論文の提出というところにきて、プーナ大学事務局は、やれあの書類が足りない、やれこの証明書を持ってこいといいつて、受理を渋るのでした。最終段階にきて、

「また、これがインドか」

と思いつつ、何回も事務局に足を運びました。いく人かの助けをかりて、特に同学のシヴァクマール・シャルマ君（現サンスクリット科助教）の手をわずらわせて、やっと大学当局はわたくしの論文を受理してくれました。

三月半ばに帰国し、四月から東大でD7が始まりました。論文の審査に九ヶ月を要し、「同年一二月八日にミスター・アベの学位（PhD）

が許可された」旨の通知を、エアー・メールで知らされたのは、師走もおしつまったころでした。

ほとんど同じころ、バンダールカル研究所から、「学位授与式が明年三月に催されるが、それにあわせてプーナにやってきて、学位論文をわが研究所から出版してはどうか。ただし、出版費用はお前もちで」という手紙が届きました。父に相談しましたら、

「費用は、わしが出してやるから、行って出版してきなさい」

といってくれました。

一九八〇（昭和五五）年三月六日、成田の空は晴れあがっていました。

プーナのバンダールカル研究所は数多くの権威ある學術書を出版しており、世界にその名を

知られている研究所の一つです。所長のR・N
ダンデーカル博士が、わたくしの拙い論文を「バ
ンダーカル・オリエンタル・シリーズ」の一
冊として出版してくれるというのです。こんな
名誉なことはありません。

自らの論文が活字化され、一冊の本となる喜
びと恐^{こわ}さを交互に感じながら、また研究所の
ゲスト・ハウス暮らしが始まりました。校組で
プレス^{プレス}のE・R・ワルウエーカルおやじと、し
ばしば口論したこともありました。わたくしが
若いこともあり、おやじはすでに何十冊も校組
しているので自分の美学をわたくしに押しつけ
るのです。また、出版費用のことで、事務局長
のB・N・パランスペー氏ともみあったことも
ありました。かれは、契約した費用の三、四割
増を要求したのです。わたくしは沈黙をもって、
それに対抗しました。一時はインドでの出版を
断念しようかと思つたほどでした。



はじめ「長くても半年で本になるよ」といわ
れていたのに、何と、ほぼ十月十日を要して、
わたくしの処女作が孤々の声を挙げたのでし
た。
(つづく)

インド留学記

その5

闇に生氣湧くインド



東方研究会囑託
保坂俊司

地上の全てを焼き尽くさんばかりの勢いで照り輝いていた太陽も、やがてその鋭い光の刃を闇の鞘に納めるように静かに沈んでゆく。地上を長く這っていた影が、いつか大地の中に解けてゆくころ朱盆のような太陽が、大きな赤い風船のようにゆっくり地平線の上に浮く。この赤い風船は、やがて弧を描く地平線に接するや溶ける様に崩れ落ちてゆく。その瞬間、地平線は

炎のように燃えあがる。西の空が燃え尽きる頃、家々の窓は開け放たれる。日昼、萎えていた木々も俄に活気を取りもどす。ムーンクイーンと呼ばれる花は、夜になるや甘い香りを放ちだす。白い可憐な十字を切つて、この花は香りで人々に語りかける。インドの女性は、恋人にこの花を髪にさしてもらうことを密かに願うとか。名といい香りといい、

その姿の可憐さといい、この花は人々にロマンをさそわずにはおかない。

インドの夜は、砂漠のそれである。昼のそれに比べて、夜の空気はヒンヤリとして膚にこちよい。人々は夜を待ちかねていたように、一斉に外にくりだす。

私がいだデリー大学の寮も同様であった。昼間は一切の窓を難く閉ざし、めばりまでして外気の侵入を防ぎ、室内にジーと籠って勉強していた仲間たちも、夜ともなれば動きだす。甘いところに群がる蟻の様に、庭の片隅に開かれたチャイ屋の周りは学生でごったがえす。二〇〇ワットの電球のもと、私もよく彼等と語りあった。

彼等は異国の学生に非常に好奇心を示してくるので、私は少しもさみしい思いはしなかった。しかし、始めの内は「保坂君、なぜ君はインド人もあまり顧みない宗教なんか学ぶのか、





日本は工業技術がすばらしく発達しているのだから、それを学ばよかったのに」という類の質問に煩わされた。そしてその度に私は、機械文明のゆきずまり、人間性の回復、物質的豊かさの限界等を彼等に納得させねばならなかった。しかし、彼等にはあまり納得してもらえなかったようである。考えてみればそれもそのはずである。彼等はインドのエリートであり、インドを富める国、近代国家として発達させることが彼等の宿命ともいえるわけだから。

勿論、そのことを十分知っていた私は、最後に「インドはまだ前途洋々だからそのような心配はいらない。しかし近代化をインドに先立って行った国が、皆物の豊富さに心を奪われて心で飢えていることを忘れてはならない。その点インドは、文化大国だから心配いらないかもしれないが、君たちのようなエリートがそういう心をいつまでも持っていてほしい」と最後に付

け加えることにしていた。そうすると彼等はいつもよろこんだ。

実際、彼等は私から見るとまったく宗教的生活者そのものだった。寮の部屋各部屋にはめいめいの神様を祭っていたし、しばしば寮内でプージャーと呼ばれる祭りをおこなった。生徒が中心になって、どこからともなく神像を調達してきて、生徒独自の祭りをするのである。この時期になると彼等は妙に生き生きとしてくる、祭りの準備で毎日花がさく。彼等は夜の一時を、毎晩星の降るような空のもとで話し、楽しくすごすのである。

インドの夜は、日本のように酒が入らないので専らチャイと、ミター（甘いお菓子）で更ける。インドの学生は店先に並べられた粗末な椅子とテーブル、まばゆいばかりの電球の下で、インドカレーを食べたあと、チャイを飲むのを楽しみにしている。

私も学校の近くのキングスウエー・キャンパスによく食事に行き、チャイを飲みながら行き交う人を眺めてすごした。

山盛りの果物やミターのみせの前には、いつも子供連れがいたし、食堂には家族連れがひっきりなしにきていた。特に映画の終わる時間ともなると人々は町に溢れる。私にはこの人込みが、子供のころよく行った緑日のような気がして楽しかった。

しかし、このような町のにぎわいとは別に、一步路地に足を踏み入れれば、その闇は深い。特に、私のいた寮は公園の隣にあったため、そこを通らねば帰れないのである。真つ暗なところも気持ちかわるかったが、友達によるとそこには毒へびが沢山いて危険なのだという。さらには、そこではよく山賊がでて殺人事件もあるとか、昼とは少々ことなったインドの顔が夜のインドにはあるのである。

インドの家族

東方学院専任研究生

清水晶子

はじめてインドの地を踏んでからもう五年が経つ。一九八三年一〇月から八五年一二月末までデリー大学の仏教学科に在籍した。学生ビザをもらうまでに二年半待たされた挙句の渡印だった。私のインドでの生活は大家族（ジョイント・ファミリー）のお宅にご厄介になることから始まった。大学の寮に入るまで三週間お世話になった。そこは大学に隣接する町の一郭にある、出版社兼書店を経営するかなり裕福な家庭であった。家族構成は祖父母と五人の息子た

ちとその家族で、三世代一八名だった。インドでも都市部では核家族が増えてきたとはいっても、今でもこのお宅のような伝統的な大家族も決して珍しくはない。

表通りに面した一区画の半分ほどのコンクリート作りの大きな建物が住まいである。一階が本屋、二階と三階が家族用の住居になっている。それぞれの家族が部屋を持ち独立している。ちやうど日本のマンションのような所に家族別に住んでいるような感じである。大きな居間と台

所が共用となっている。独立した家族用の部屋がありながら、皆この居間に集まってくる。インド人は一般に一人で部屋に居ることをあまり好まないようである。私もお客用の個室を与えられていたが、なるべく居間で家族の人たちと過ごすようにしていた。知らない土地へ一人で行って来た私を、家族同様にあたたかくもてなしていただいた。おかげ様でインドでの生活にもすぐとけ込むことが出来たし、その後も何かとお世話になり、二年余の留学中に一度もホームシックにかからなかった。

このお宅には、学齢期の子供たちが五人いたが、全員キリスト教系の私立の名門校に通っていた。きちんとした制服を着用し、家の近くまで来るスクールバスに乗って通学していた。すでに小学校の一年生から英語のテキストを使用し、国語以外は英語で授業を受けているということだった。日常の会話はヒンディー語を使っ

ているが、四年生くらいになればかなり流暢に英会話ができる。授業はだいたい一時には終わり、帰宅して昼食を摂る。宿題も毎日出される。子供たちはいつもたくさん教科書を持って登校していた。勉強の方もなかなか大変のようだった。一つ気がついたことがあった。この子供たちが路地に出て近所の子と遊んでいるのを一度も見ることがなかった。いつも自宅の中庭で自分たちだけで卓球やバドミントンをしてい



るか、ビデオを見ていた。現在でもインドの社会には昔からのカースト制という階級制度が厳然として根強く残っている。だから、子供たちの間でも誰とでも自由に遊ぶということがないのだろうか。二、三軒先の店にお菓子を買いに出るくらいで、子供たちだけで遊びに行くなどということは許されていないようだった。そう言えば、大きい子でも公共のバスに乗ったことがないと言っていた。

大家族と共に暮らしている主婦の一日は多忙である。一人一人が交代でその日の家事当番を担当する。家族全員の食事の仕度、市場までの材料の買い出し、通いの洗濯屋へ出す洗濯物の枚数と受け取りの勘定（なくされないために）、子供たちの世話、そして使用人に対する監督など。

この家の屋上には、住み込みの数人の使用人の部屋があった。実際は彼らこそこの家で最も

忙しい人たちで、それぞれに自分の持ち場が決まっただけで、他人の仕事には決して手を出さない。それで大家族の家では自然と使用人の数も多くなる。彼らは早朝から夜遅くまでよく働く。というより働かされている。はじめのうちは、日本との習慣の違いもあって自分でできることはなかなか頼めなかった。また家の子供たちが学校から戻って来て、卓球に興じているその足元を、同じ年くらいの使用人の男の子がもくもくとふきそうじをしているのを見たりすると何とも複雑な思いがした。

大家族の中で生活していると、自分の世界だけを持つことができない。束縛感を感じることもあるが、家族の中でのあるべき自分の立場というものが見えてくる。小さいときからその中でいかにふるまうべきかを、自然と体得していくようである。家長の祖父を中心に家族の絆は堅い。

お茶は薬

『喫茶養生記』
きつさ ようじょうき

(駒沢女子短期大学学監 教授)

東 隆 眞

禅宗のお寺では、しばしばお茶をもちいます。あらたまった儀礼のときでも、平生のお食事のときでも、あるいは、お客さまをおもてなしする時でも、お茶は欠かせません。

仏、菩薩、祖師、亡くなった方がたに対して、生きていますがごとくに丁寧に茶を献じ、客人にお茶をすすめ、おたがいにお茶をのみます。なにかと言えば、まずお茶です。

八世紀ごろ、すでに、茶と禅とのかかわりは、中国の文献に見られます。

日本の茶の湯は、千利休居士らしい、禅宗か

ら始まっていることは、いまさら言うまでもありません。

が、それは、どちらかといえば、臨濟宗(とくに京都は紫野大徳寺)です(ちなみに言うくと、黄檗宗では煎茶道が盛んです)。

曹洞宗では、直接、茶道に結びついた教えは無いと言っておいた方が早いでしょう。道元禅師に、お茶の教えはありません(曹洞宗と茶道の歴史的諸問題の一つとして、『大乘寺便り』第二二号(石川県大乘寺発行)に、「茶道と曹洞宗」と題して拙文をかかげておきました。ご高覧い

ただければさいわいです)。

鎌倉時代、栄西^{えいさい}禅師^{ぜんじ}は、中国で臨濟^{りんじ}禅を学び、日本に帰って、これを伝えました。

わが道元禅師の師匠筋にあたるお方です。

栄西禅師は、彼の地でお茶を知り、種子を持ち帰り、梅尾の明恵上人にさしあげました。

京都、梅尾の高山寺には、明恵上人以来の茶畠^{はし}がいまに伝えられており、日本最古の茶園だと言います。

静岡県は、京都の宇治とならんで茶の特産地として有名です。

梅尾のお茶が、関西、関東へと、全国に広まっていたのです。

静岡県榛原郡金谷町、牧の原公園には、「茶祖 栄西禅師の像」が建てられています(高さ四、五メートル。白セメントづくり)。日本茶輸出百年祭に、茶祖栄西禅師顕彰会が建立した)。

この栄西禅師に、『喫茶養生記』(二巻)とい

う著書があります。

「お茶を飲んで健康を増進する」ことを書いた本です。

「茶は、養生の仙薬なり」ということばからはじまります。

「喫茶」ということばは、私たちにもなじみが深く、「喫茶店」などと使われています。

もともとは、禅とかかわりの深いことばです。中国、唐の時代に、趙州^{じょうしゅう}という名の禅僧がおりました。

ある修行僧が、「いったい、仏法とはなんですか、いますか」と問うたところ「喫茶去^{きつせきこ}」(お茶をめしあがれ)とこたえた——そういうエピソードが伝えられています。

仏法は、まことに大きく、広く、深いものですが、実は、お茶を飲むといった身近な日常生活を抜きにはありえないのだという意味がこめられています。

だからと言って、なんの問題意識もなく、なんの自覚もないままにお茶を飲んでも、それは仏法、禅となんの関係もありません。

本人の問題意識や自覚のあるなしにかかわらず、お茶の効用はそのとほろにあらわれていて、お茶の効用は、ほんとうにお茶を飲むことにはなっていないぞ。ここに、このエピソードの要が秘められています。

ですから、一ぱいのお茶を飲むのも、容易であり、また、容易なことではないのです。

『喫茶養生記』は、承元五年（一一二一）、栄西禅師が七一歳のときに著わしました。

実朝が病気にかかったので、栄西禅師がその平癒を祈り、お茶を添えて本書を献じたところ、実朝が大いによろこんだといっています。それは、建保二年（一一二四）のことです。

『喫茶養生記』は、「茶は、養生の仙薬なり」と言っているとおり、薬としてのお茶のことを書いてあります。先進国の中国で学んだことを日本人に知らせたいというわけでしょう。



お茶は、いろいろの場面でさまざまに用いられますが、ここでは、あくまでも薬としてのそれなのです。

ですから、榮西禪師は、薬剤師というか、医師というか、そういう一面もそなえていたことがわかります。

上巻は、六章にまとめてあります。

一、総論として、お茶を飲んで五臓(肝、心、肺、脾、腎の五臓)の調和をはかることを説いています。

二、各論として、

お茶のさまざまな異称を紹介しています。

三、お茶の葉の形や色についてのべています。

四、お茶の効能を明らかにしています。

五、お茶を採取する時期について教えています。

六、お茶の採取方法を示しています。

七、お茶の製法を書いています。

下巻は、

一、魍魎、魍魎を退散して、病気を治す方法。

五種の病気として、飲水症、中風症、

拒食症、瘡症、脚気症を挙げ、これらの

病気は、冷えるのが原因であるとし、そ

の療法として、桑の木を用いる。

二、桑粥の服用法。

三、桑の煎じ法。

四、桑の木の服用法。

五、桑の木を口に含む法。

六、桑の木の枕の効用。

七、桑の葉の服用法。

八、桑の榧みの服用法。

九、高良(中国の地名)の薑きしょう(しょうが)、は

じかみ)の服用法。

十、茶を飲む方法。

十一、五香煎の服用法。



いま、紙数の制限がありますから、詳しい説明をほどこすことはできません。

が、ひとつ、ふたつ、気のついた点をご紹介します。おきましよう。

上巻で、こんな意味のことがしるされてあります。

五臓の中心は、心臓である。

心臓が健全なときは、ほかの臓器も健全である。

心臓を病むと、皮膚や肉の色が悪い。

短命である。

食べものを受けつけなくなる。

そこで、苦味にがみのお茶をのむとよい。

苦味は、五味のなかで最高である。心臓は、

この苦味を好む。

心臓は、南方の宝生仏ほうしょうぶつ、虚空蔵菩薩にあたる。

宝形印を結んで、吽字うんの真言を唱えて祈念すると、心臓はよくなる。

つまり、心臓病を治すには、物質としての葉であるお茶と、菩薩に祈禱する信仰の両面からの手当てが大切だということです。なかなか理にかなって、現代のわれわれにも適応される教訓を含んでいます。

ついで、下巻で、さきほど挙げた五種の病いは、桑で治すことが出来ると説いています。

「桑の樹は、諸仏、菩薩の樹」である——つまり「靈木」だと言っています。

そこで、桑の木や実の酒、粥、桑の木の枕、揚子など、そのほかを用いることをすすめていきます。

〔ちなみに、道元禪師は、中国に留学したとき、師である如浄禪師（中国浙江省寧波、いまの太白山天童寺第三二世）から、桑の椹みを食べないようにせよと注意をうけています。こうなると、さきほどの榮西禪師のお説とはまるでちがってきます。いったい、どういうわけのもの

でしようか。

また、ちなみに、中国料理の専門家、橋本三郎氏にうかがったところでは、桑の木の皮を出汁じゅうの材料とする習慣は、中国では、むかし、あったとのことでした。

ついでに、もう一つ。

道元禅師の『典座教訓てんざきょうくん』に、「倭榧わじん」という語が出てまいります。

「倭榧」とは、日本産の椎茸のことだというのが、三百年來の解釈です。ほとんど、誰も疑っておりません。

北大路魯山人の門人である平野正章氏も、「倭榧」に、わざわざ「倭榧しいたけ」と振り仮名をつけておられます。

しかし、「榧」は、「桑の実」というのが、諸橋轍次博士の『大漢和辞典』（巻六）の説明です。

いったい、『典座教訓』の「倭榧」の正体は何であるのか。私は、かつて関係する学会で問題

提起をしたことがあります（拙稿『典座教訓』に見られる苔と倭榧について）、「宗学研究」二六号）が、いまのところ、明確な結論をえていません。）

私は、茶道にも医学にも料理にもなにひとつ知識をもたない門外漢です。

それで、『喫茶養生記』に説いてあることが、現代の時点でのように評価できるのか、専門のお方におうかがいしなければなりません。

ただ、日本文化史上の名著とされる『喫茶養生記』に触れていただくにかのきっかけになればと思うのみです。

ともあれ、それが、抹茶であれ、煎茶であれ、あるいはコーヒーであれ、眠む気をさまし、心神をさわやかに軽くし、おたがいになごやかになる——そんなところに喫茶の効用があるのでしよう。

二十一世紀の仏教と私の役割

聖母女学院短期大学助教授
延暦寺学園叡山学院教授

星 宮 智 光

今世紀に入り科学技術は想像のおよばない規模と急速さで発達しつつあり、政治体制の如何にかかわらず、これによって人間の生活もまた大きな変化をみせている。この変化の世紀といわれるなかで、とくに特徴的な傾向は、われわれの生活が地球的規模のなかで営まれていくことである。交通運輸、通信の発達、経済構造の国際化は地球上の物理的な地図を無意味なものにしている。オーストラリア産の生鮮食料品

がわずか一日で日本に空輸され、ワシントンの出来事がもう一時間後には東京の経済市場を左右する。地球は一つであるという実感は、今日のわれわれの生活のいたるところで経験する。このような地球的一体化という現象はあらゆる面で今後いつそう促進されていくであろう。もはや一国家や一部階級の利益をのみ優先させるような政治経済倫理などはもはや時代錯誤として捨てられることになろう。政治経済はいち

はやく国際協力が成立し、一種の地球政治、地球経済といった理念がいつそう現実味をおびてくるはずである。今日、日本経済の繁栄とともに国際摩擦が生じ、貿易の黒字減らしが真剣に問われているのも、こうした兆しの一つである。

二十一世紀は地球一体化の時代である。さらに宇宙的一体化をさえ予想しなければならぬだろう。そして、その一体化現象のなかで、もっとも重要なものとして徹底した平等思想、個人間を問わず国際間を問わず、あるいは山川草木を問わず、あらゆる存在の尊厳とその平等を信念とする倫理でなければならぬ。国益の優先とか、国家間の差別、人権の無視、人間本位の自然観といったやりかたからは真の地球的一体化の政治経済は実現するはずもなく、そのような価値観は結局は矛盾を生み自己崩壊をもたらすであろう。しかし、政治経済の面では平等観が徹底し地球的一体化の倫理が実現するの

は、そのもたらす結果が直接的かつ現実的であるだけに案外容易ではないかと考えられる。

これにたいして、おそらくもつとも頑迷に対立と葛藤をつづけるのは、文化や言葉の面であり、また諸宗教、イデオロギーの対立ではないかと思われる。現に、今日の世界中の紛争を見ても、それらには何らかの宗教的対立がはらんでいるのに気づくはずである。言語のちがいによる障害、文化価値の異なることよって生ずる誤解と対立葛藤、信仰する宗教が相違することよって生み出される蔑視と憎悪、こうした対立をいかにして克服するか、普遍的な平等思想によつて真の地球的宇宙的融和を実現し、人類をはじめ悉有のなかにいかにして平和と福祉をもたらすか、これが二十一世紀の人類の課題でなければならぬ。

こうして、二十一世紀の仏教は、この人類の課題にたいして応答し、新しい道を率先して創



造するものでなければならぬ。大乘仏教では臨機応変とか対機説法とかいい、また時機相応ともいって、時代の相と時代の人びとの求めるところを重視する。大乘仏教にいたるまでの仏教の歴史は、このことを如実に教えている。鎌

倉時代の祖師がたは末法という時代認識を根拠として仏教の新しい展開を選択したことは周知のとおりである。二十一世紀の仏教は正しく深く二十一世紀の地球一体化の状況を凝視しなければならぬ。頑迷に潜在しつづける文化的誤解、言語的障害、諸宗教やイデオロギー的対立、これらのものをいち早く解氷する役割を担わなければならない。そのためには、まず第一に率先して自己僧伽の変革を行い、地球的一体化の方向に創造的に参加しなければならない。

では、二十一世紀の仏教のなすべき自己変革と時代にたいする創造的参加とは具体的にはどんなことであろうか。これにたいして、一日本仏教僧としての若干の私感を次にのべてみたい。

まず、第一は自己の宗教のみを絶対視せず、諸々の宗教にたいして寛容と共存をもって接することである。仏教には古来から教相判釈という

ものがあり、自宗の優越性を弁証する論理があった。天台宗の五時八教という教判はその典型である。自己の信心の形成にはもちろん教判は必要であるが、これを短絡的に普遍化し絶対化することは危険である。教判はむしろ相手宗教への深い理解の方法でなければならず、他宗教をみずからに摂受するための発想として展開されなければならぬ。日本仏教における習合思想というものは、この点、高く評価したい。一九八七年夏、比叡山で開催された宗教サミット会議の成功は、二十一世紀の宗教相互の融和と協力という点で、宗教史における一大金字塔というべきであり、二十一世紀の仏教のありようを示唆していて興味ぶかい。宗教相互の寛容と融和の思想にたいして、仏教は鋭く深い発想を提供することができるし、また仏教の歴史においてその好例を多く残している。

第二は、仏教の国際化である。仏教の中国化、

仏教の日本化という現象、あるいは仏教のアメリカへの土着化などがさまざまに論じられてきた。そしてその動向は一方において必要であり必然でもあった。しかし、いま二十一世紀の仏教を探求しようとするとき、脱日本仏教運動が求められているのである。中国仏教を脱しえたからこそ、仏教は日本に根付くことができた。同じように、日本仏教の特殊性を強調するのではなく、その世界的人類的普遍性を掘り起こし、地球上のすべての人びとに受け入れられる仏法真理を説き実践するのになければならない。鎮護国家の仏教にのみとどまるのであっては、世界宗教とはいえない。二十一世紀の宗教としては時代おくれであろう。国家の枠を超えて、世界衆生を再発見し、世界の衆生とともに歩むのになければならない。日本文化にとじこめられた宗教としてではなく、もはや地球一体の時代にふさわしい、世界衆生の救済と福祉を実現す

るものでなければならぬ。これが仏教の国際化である。キリスト教者、イスラム教者、儒教信奉者、あるいは民族宗教者、いかなる宗教の信者とも出会うことができ、対話し、融和できる仏教、かれらとともに人類的福祉と地球的宇宙的平和を実現できる仏教をめざす。これが仏教の国際化である。

第三は、三蔵すなわち経律論を世界民衆の言語によって説くことである。これには二つの側面がある。一つは經典を従来の漢文あるいはサンスクリット、パーリ等の古典語から脱出させて、日常語によって説くことである。釈尊の言葉、高僧の語句は尊く神聖であるが、それは意味内容に価値があるのであって、これを呪文のごとく誦することは無意味である。思いきって現代日常語によって表現すべきであろう。鎌倉のころ、法然上人も道元禪師も漢文を脱して、和文で法を説いたのである。これは新しい時代

に臨むものに大きな示唆である。もう一つは、世界民衆にわかる仏法を説くという点で、三蔵の英語訳を促進することである。地球上でもっとも流通しているのは英語である。英語はおそらく二十一世紀の地球語になると思われる。二十一世紀の仏教は英語による仏教でなければならぬだろう。明治以来の日本仏教界がなした最大の事業は、大正大藏經の編集出版であったといえる。二十一世紀の仏教をより現実的にするためには、この大藏經の英語訳の作製事業から開始したいものだ。英語事業を進めてゆく過程のなかで、さまざまな困難が生じるはずである。しかし、それらの困難な問題を解決し克服する過程自体が実は二十一世紀仏教の形成であるといふべきであろう。

他にも私感¹は山積しているが、しかし最も大事なことは、二十一世紀の仏教探求の核心は、源泉は自己の修証であるということである。

中道実践の「正」観に関する一考察

東京大学大学院 洪 淳海

(韓 国)

はじめに

インドの哲学並び宗教において「正」なる語はある思想を形成する独自概念として取りあげられることはない。それは普通「正しい」という形容詞として使われている。あらゆる思想は「正しい」とは何かを探究し、なお、「正しい」とするものを追求して一貫した体系を形づくろうと努力していることである。と同時に一つの最高価値としての「正」なる理想型が設けられ

ても、その具体的な面においては時代的狀況と思想の發展にともなつてその様子を変化せざるをえない。インドの思想においては「正」なる概念そのもの自体が大きな問題とはされていないが、絶えず「正しい」ものを追求し、実践しようとするのである。

このような「正」観の流れを仏教の実践面に重点をおいて明らかにしてみようとするところに本論の目的がある。

仏教での「正」という語と最もたやすく関連

づけられるのは修行中道の八正道の「正」なのである。筆者がここで「正」なる語を主題に採ったのもこの八正道に注目したからである。ところが八正道の意義は初期の仏教の独立した正道として言い尽くせるものではない。それ故に正道が如何に啓発されたかをさぐるうとするところから「正」という語を設定したのである。

ところで、八正道における「正」はサンスクリット語では *Samyak* で、「一緒にいく・結合された・統一された・完全な・あらゆる・同じ方向の・正確な・正なる・誠の・正しい・同一な」1) などいろいろの意味に用いられ、パーリ語では *Samma* といひ「正しい・充分な・全く・正(漢)」2) などの意味に用いられる形容詞なのである。しかしここで「正」観という時の「正」は形容詞として使用されているのではなくて名詞として使われているのである。このような用い方は空観または空思想という場合の「空」の

用法と同じである。

元来「空」は *Sundy* といつて形容詞だが、実は *Sunyata* (空性) の意味をもつ名詞として使用されている。

「正しい」とは何かをインドの宗教と哲学の立場で探究してみればそこには二つの面があることが判る。その両面とは原理の面と実践の面である。西洋の倫理学者の G. E. ムーアが提起した倫理学の問題の「如何なる行為を我々はなすべきか」(What actions ought we to perform?) は「如何なる行為が正しいか」と同じ問題だといふ。3) これは原理を最も価値があるように実現するための正しい実践でなければならぬという意味に受け取ることができるといふ。一つの原理はその具体的な実践がともなつてこそはじめて最高価値として充分に実現されるのである。八正道はこういう具体的な実践道即ち実践としての「正」と言える。宇井博士が「八正道は仏



陀の全教説の趣意を簡潔に実践を主として遺憾なく縮圖して居るものといふも決して過言でない」4)と述べているのもこのような意味に解される。仏教における「正」観はこのように両面から考察することができ、これはインド思想全体の一つの流れでもある。そして原理としての「正」が展開されるとともに実践としての「正」がそれに伴われて為し遂げられ、そして全体としての有機的な関係を保ちながら理念と実践の乖離を解決しようとする努力がみられるのである。つまり実践的宗教としての仏教が觀念に流れるのに従って、これに対する反省として実践的方向への手さぐりとしてのある行動原理を提示し、かつそれが強調されたものと思われる。このような考察は仏教が衆生救済を指向する宗教としての実践的な立場を理解するのに適当だと思う。ただし、仏教の「正」観の流れはその様式においてインドの正統思想を受け継

いだものと考えられる。こういうところからインドの正統思想における「正」観とを関連させることも無益とはいえないであろう。

D h a r m a

時代の移り変わりの中で、インド人の思考にたえず浸透し、彼らに最も権威をもって思考と行為に一貫した様式を創造してきた一つの概念があるとすれば、それは正に Dharma の概念⁵⁾だと言える。この Dharma はあらゆる形態の人間行為を評価し、決定するのに適用される広い意味を保つものであり、それ故に、Dharma の概念は確かにインド人において生活の最高基準であった。Sri Aurobindo はインド文明の三大特徴を靈性 (Spirituality) 、生命力 (Vitality) 、知性 (intellectuality) とし、これらの各々もまた様子は皆 Dharma という概念から形づくられたものとしてゐる。⁶⁾ Dharma という語は

धर्मに由来した言葉で「決められたもの・確固たるもの・判決・法令・訓令・法の用い方・実践・しきたりの遵守又は指示された行為・義務・権利・正義・道徳・宗教・宗教的功績・善行」⁷⁾ などの意味をもつものと定義している。又「正しさとの一致・宇宙的真理・慣習的及び伝統的な規約・正義・不変の秩序・これらすべてのものの変形」⁸⁾とも定義している。以上のように広い意味を持つ Dharma の主要な役割を重視しつつ法学的側面からは Dharma を「インドの自然法と社会法の総体」⁹⁾として把握している。「法」と表現された仏教における Dharma は仏教成立時インド社会で用いられた Dharma と同一語で仏教によって一般とその意味が拡大され、重要視されるに至った。仏教においての Dharma は極めて広い分野を包容するもので、実際、人間生活の全様相において言及されている。¹⁰⁾

元来 Dharma は中国の道とか西洋の Logos に相当する概念として Rta 即ち宇宙的規律や道徳的規律を兼ねそなえた意味を持つものである。仏教における Dharma はその語自体はバラモン教から由来されているが、その意味においては Rta の二つの側面を背景にしているのである。11)しかし、バラモン教では Rat か Dharma を問わず、いずれもその本源を人格神にしているが、仏教の Dharma (法) は支配者としての意味を持つものを否定し、純粹な Dharma 自身の独立的意義を強調しているのである。このような意味において仏教の Dharma を二つの面に分けて説明することができる。即ち理法又は法則としての Dharma と教法としての Dharma がそれぞれである。12)前者は現象界と理想界に関する原理であり、後者はそれについての教えだと言いうことができる。十方三世に適用される普遍性と必要性を持つもので、仏陀が体

現しそれによって教団の生命となった法、いわゆる仏陀の一家言ではなくて、まさに不変の真理を代表するものと確信される理由はそれぞれが理法としての Dharma を指すからに違いな



い。13)これについて Dharma とは仏の教示を集めた聖典を法と名のつたもので、それは不易の規範を意味すること又、四聖諦などの教示を法と名のつたので、その教示が分離解脱に至ることのできる不易の規範を認めたのは実に教法としての Dharma を指すものと考えられる。従って仏陀の最初の教示の八正道は教法としての Dharma であり、これは理法を体現しようとする実践方途としての「正」観だと言える。

中道実践の中層的性格

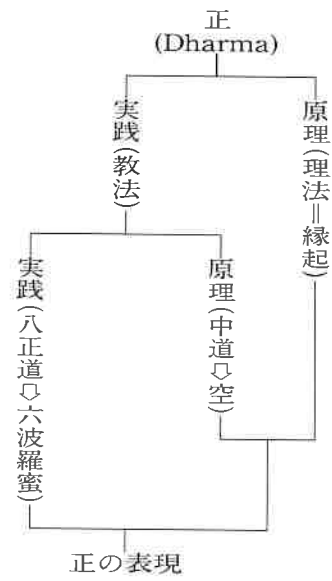
仏教における上記の両面をほかの言葉で言えば前者を哲学的側面、後者を宗教的側面と表現することができる。即ち本論の立場からは原理面と実践面になるのである。しかもこれは仏教の教説が原理と実践の両面において説かれていることを示唆するものでもある。したがって宗教的で且つ実践的側面の教法としての Dhar-

ma も更に原理と実践の両面へ展開されていると考えることができる。この場合教法の原理面は理法としての Dharma 即ち法性(真理性)の表現であり、教法の実践面はその法性の体現方途なのである。例を挙げれば、仏教で見る理法としての Dharma は縁起である。ところが教説即ち教法での Dharma においてはこの縁起が中道と表現されている。阿含では幾つかの方式によって中道が説かれている。有と無あるいは断と常という両端を排除する「有無中道・断常中道の場合の中道は存在の中道的在り方、中の存在論を説くものであり、それは縁起説になるという意味である」14)とされている。又「理論的な意味では有と無、あるいは常住と断滅の両端を離れた見解が中道とされている。そしてこの中道は積極的には縁起しかも十二支縁起すなわち十二因縁を見ることがと説かれている」15)ともいわれている。「正しき仏教的立場は皆中道

である」16)とされているが、これは皆仏陀が証悟した理法が中道だと表現されていることを指すものである。ところが仏陀の教説ではこの中道の具体的な実践方途として八正道が教示されている。「八正道の各々が正道であるから八正道即ち八中道であり―正道であるから八正道即ち八中道であり―正道即ち―中道である。更に各八正道そのものが中道である。」17)とされているところからも知られる如く八正道は中道のほかの表現なのである。

以上の例の如く、実践的側面の教法としての Dharma において中道は原理面、八正道は実践面になるのである。そしてこの中道は原理的側面の理法としての Dharma 即ち縁起の実践的表現なのである。このような観点から仏教の「正」観の構造的関係を次のように図示することができるとが。

ここで例に挙げた八正道は Dharma 自体の



仏陀教説の核心を体得するために最も「正しい」方途で、仏陀によって直接そして一番先に説かれたものだといわれている。しかし教理の発達過程において自利的側面がより強調される立場で八正道が説かれるようになったのが見られる。しかし、仏教は自利利他の宗教であり、その始めはむしろ慈悲という利他的側面が先んじたものと考えられている。特に八正道が中道の



実践道だという点では八正道も自利と利他の両面を重視することが仏陀の真意である。こういう立場で中道が特に大乘仏教に至って空思想へと展開されたのは当然な思考の進展だと見られる。したがって「正」観として提示される実践道もその姿を異にするようになった。このようにして新たに強調される実践としての「正」観が六波羅蜜又は十波羅蜜として理解されるのである。中道思想の大乘的進展となった空思想は

虚無主義ではなく、絶対否定を経た一切肯定としての空であり、中道としての空である。空の内容である中道の観点からは一切がどちらか一方に偏ることなく徹底的に否定されるため、そのような否定自体は直ちに有に転化され、結局一切肯定になるのである。そしてこのような肯定を通して宗教的救済を指向することになり、積極的対他的な行動原理、即ち実践的「正」が要求される。従って龍樹が中道として理解した

空は空を無と理解しようとする虚無主義の打破であり、既存の「正」観に対する反省である。

したがって空と六波羅蜜は中道と八正道を大乘的に展開した原理と実践としての「正」観なのである。

『中論』第二十四章十八偈で「およそ、縁起しているもの、それをわれわれは空であること（空性）と説く。それは相待の仮説（縁って想定されたもの）であり、それはすなわち中道そのものである」18)と言ったのは空||中道||縁起||とって空がDharmaの原理的側面から受け継がれてきたことを表すものと思われる。「空」が既存の「正」観に対する反省なら六波羅蜜も八正道に対する反省である。すなわち大乘仏教の興起に従って浮上してきた六波羅蜜または十波羅蜜は八正道が看過しやすい能動的で利他的実践を強調するのである。こういう「正」観の流れがそれぞれの別の領域で展開されるのでは

なく一連の流れの中で重なり合いながら前者を反省し、発展的に指向していくという意味である。即ち縁起↓中道↓八正道↓空↓波羅蜜へと進んでいくが前にある原理を常に包容しつつ実践的立場で不十分な面を補充しながら進展していくのである。「正」観の発展についてのこのような理解は筆者自身の主観的な解釈によるものである。したがってこれに対してはより具体的な立証が必要であろう。

おわりに

これまで筆者は仏教において最も正しいと重視したものを「正」と名づけてその流れを論じてみた。それは原理または原則として思考と行動の基準になる「正」と、これに伴う実践方途としての「正」で選別した。そして一つの対をなすこのような「正」は一連の流れを経ながら進展していくことをみた。

以上の論旨を結論的に言えば、次の如く要約することができであろう。原理としての「正」が中道から空に進展すると共に浮彫りにされる六波羅蜜または十波羅蜜は八正道が看過しやしない能動的で対他的な実践を強調し補完するより発展した形態の行動原理である。即ち波羅蜜は八正道に欠如している対他的（社会的）項目である布施と忍辱を付け加え、自利と利他を同時に追求する理想的な実践道になるのである。このような「正」観の流れにおいては原理と実践が別個の領域で展開されるのではない。一連の流れの中で重層されながら前段階を反省して発展的に最高価値を指向して行くことによって有機的な関係を維持しているのである。したがって空思想は縁起即ち中道の原理に立脚しており、同様に六波羅蜜は八正道の趣意が含蓄している実践という点から前段階の「正」の価値と意義が看過されてはならない。八正道の「正」

が実際に持つ意味は要するに法 (Dharma) だという。しかしこの Dharma の意味を前に考察した包括的な意味の Dharma としてのみ理解してはいけないのである。この言う Dharma は日常われわれが対処していく現実に適用する真実であり、神秘におおわれたものではないのである。19) それでどのような場合にも自分が経験し得る現実的なものにその基礎をおいているのである。20) この Dharma は正に神秘的でもなく、観念的なものでもない。それは現実の問題を解決せんとする公明な真理であり、真実なのである。このような意味を通してみる時、八正道は日常生活においても正道となるよう再び見直される必要を痛感する。そのためには八正道に現れた世俗的な正道の概念を確実に究明することによって日常生活や修道生活において八正道を正しく適用し得るものと思われる。しかし余り価値観に重きを置き過ぎると実践道は弱化

するほかない。現実生活に対する仏教的行動原理が波羅蜜に忠実に内在して再開発されたにもかかわらず実際には積極的な行動に現れていないのは我々の視点が原理的側面に偏っているためであろう。原理面は実践面が並行することによって完成される。仏教「正」観が両面を持つのもそのような理由からである。このような意味から波羅蜜の実践的意義も再確認されるべきであり、更により具体的な行動における啓発が重要であると言いうことができるとであろう。

註

- 1) Monier-Williams(ed): Sanskrit-English Dictionary, Oxford The Clarendon Press, 1889, P. 1811.
- 2) 雲井昭善『巴和小辞典』、東京、法藏館、昭和36、P321.
- 3) 岩崎二雄『ムーアの倫理学の基本的構想と「正」の規定』、『テオリア』第8輯、九州大学教養部、昭和39、PP.10-11.
- 4) 宇井伯寿『印度哲学研究』第三卷、甲子社書房、大正15、P. 6.
- 5) CF., B.G.Gokhale; Indian Thought through the Ages, Bombay, Asia Publishing House, 1961, P. 24.
- 6) CF., loc. cit.
- 7) Monier-Williams; op. cit., P. 510.
- 8) W. Spellman, Political Theory of Ancient India, Oxford, Clarendon Press, 1967, P. 98
- 9) 宋鍾辰『古代印度の自然法思想研究』、東国大学校、博士学位論文、1982, P. 14.
- 10) Piyasena Dissanayake; Political Thought of the Buddha, Colombo, The Department of Culture Affairs, 1977, P. 100.
- 11) 木村泰賢『原始仏教思想論』、木村泰賢全



集第三卷、東京、明治書院、昭和11、P. 96.

参照

12) 右 同

13) 右 同

14) 平川彰、「阿含の中道説」、『仏教学研究』第二

集、国際仏教徒協会、1972-1973、P. 13.

15) 矢島羊吉『空の哲学』、日本放送出版協会、

東京、P. 180.

16) 宮本正尊、『根本中と空』、第一書房、昭和

18、P. 495.

17) 右 同、P. 16.

18) 三枝充憲、『中論偈頌総覧』、第三文明社、

1985、P. 766. 参照

19) 井上教順、「正見に関する一考察」、『印度学

仏教学研究』、第一卷第二号、東京、日本印

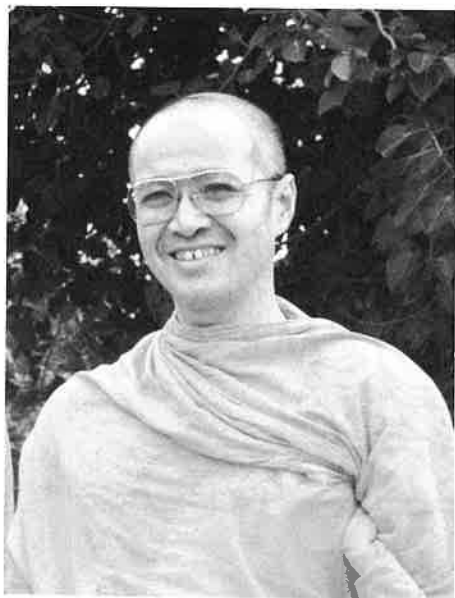
度学仏教学会、昭和28、P. 429.

20) 右 同

第四期育英会入選論文

トウドンと供養の旅

ワット・パクナムにて安居中 洪井 修



ワット・パクナムに入堂して以来十ヶ月目を迎えようとしております。この期間、ほとんどをタイ語の勉強に費しました。

その国の言葉を理解することがコミュニケーションの第一歩と考えたからであります。自分が成すべき行事、戒律、日常の様々なことからにおいて、誤った解釈をしてはいけないというのはもちろんですが、まずタイの風土に溶け込んでみようと思いました。

タイ僧とのコミュニケーションがとれ、僧院

の生活に慣れてくるに従い、この国で成すべきことがだんだんと明確になってまいりました。

それはトウドンです。

トウドンとは、煩惱のほこりを払いのけ、仏道を求めるために衣食住を食らずひたむきに仏

道を修行することである。その為に特に努めるべきこととして次の十三種がある。

- 一、糞掃衣のみを着る
- 二、三衣のみを用いる
- 三、乞食して得た物のみを食べる



四、家を順番に托鉢して回る

五、一日一食

六、鉢中の物を食べる

七、食べ終わった後で献じられた物は食べぬ

八、森にのみ住む

九、樹下にいる

十、露地にいる

十一、墓地にいる

十二、人が設けてくれた所にいる

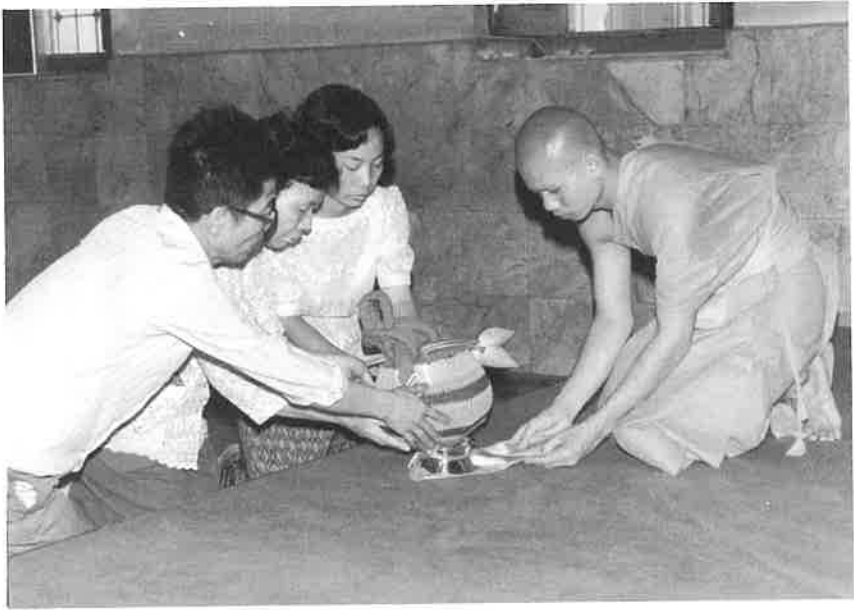
十三、眠らずに座っている

タイ日辞典(富田竹二郎著)より

タイ上座部仏教においては二二七の戒律が厳しく定められていることは周知の事実ですが、このトウドンは、遊行、行脚の際、特に重んじられるものです。

これらの種の戒は時代にそぐわないものもあり、現在では少しづつその形を変えてきてはいます。このトウドンを一年に三ヶ月から四ヶ月





行じながら、五年から十年の期間を設けて、タイ全土を歩こうと計画いたしました。

自分の足で見、その土地の僧や人々と語り合い、その土地の文化、生活、習慣、物の考え方、気質、仏教のつながりなどをじかに肌で感じ取りたいと考えます。

もう一つの目的はカンボジアに供養の行脚をすることです。

十年程前、ポルポト政権下で一〇〇万とも二〇〇万ともいわれる人々が虐殺されました。虐殺とは、殺される側にとって、殺される何らの理由もなく、殺す側の一方的な論理、強制によって言論や行動の自由を奪われ殺されてしまうことです。

当然のように、殺される側の人々にとっては、「何故、どうして」という悲痛な叫びが、あつたはず。この「何故、どうして」という叫び声の裏に、なすがままに殺された人々の怨念

は、今もなお戦火のいえぬ土の上に生き続けています。虐殺をまぬがれた人々にとっても、この悪夢のような出来事は生涯忘れ得ぬものでありましょう。

虐殺された人々、虐殺をまぬがれた人々の魂と心にわずかでもやすらぎを与えない限りこの国の平和も発展も望めません。

たとえ非力でも、一歩毎に経を誦する供養の旅をせすにはおれません。

幸い、カンボジア入国の手続きをすることができました。カンボジア政府が私の入国を許可してくれるまでたとえ何年でも辛抱強く待つつもりでした。

私の供養の旅はカンボジア一国にとどまるものではありません。ラオス、ベトナム、安らぎを願う声なき声に導かれて、どこまでも旅を続けることが、私の僧たる使命と感じております。



禪の国際化と私の役割

大菩薩山僧堂にて安居中　バシユール・ルース淨信

(フランス)

禪の国際化について話すには、しばしばいわれている禪についての見解を簡単ながら考察し、何が禪ではないかということ定義する必要があるだろう。

禪は、仏陀の教えを伝える全く日本的な形態である、ヨーロッパではたびたび言われ、又、日本でもしばしば聞かされる。そうだとすれば、われわれ日本人ではない者にとつては、永久に近づくことが出来ないものであろう。何故なら、文化・言語・社会の進展等すべてがわれわれを日本から遠ざげるからである。従つて、日本人

ゆえに当然知っている者が一方にあれば、他方に西洋人があることになる。この西洋人の中には、又、二つの異なる姿勢がある。一つは、こういった東洋的な神秘的な信仰を先験的に拒絶するといったものであり、もう一つは、自身に得心がゆかず、自分達の生活にも不満を持ち、異国情緒を求め、はつきりとつかめぬ神秘性にひかれて、新しい感動を求めようというものである。

正に、そこには、禪について話し合うどころか「私は知っているのだ」という「私」と「知

りたいとも思わない”という“私”の相對立する“エゴ”の戦いがあるのみなのである。マハーキヤンヤパ（摩訶迦葉）の静かなる笑みからは程遠いところにあるのだ。

中国の師は言っている。“私が食べる時私は食べ、私が眠る時私は眠る”と。ではその“私”とは誰なのか？ 勿論、それは、もはや、中国人でもなければ日本人でもアメリカ人でもない。ただ、食べるという行為であり、眠るという行為そのものなのである。そこには、文化の相違はなく、個人は存在しないのだ。スンニヤータ（空ということわり）があるのみなのだ。

“全てを棄てて観よ”（道元禪師）

現代世界は國際的である。飛行機やあらゆる伝達手段が町と町、国と国の境界線をなくし、地球の反対側に住む人々のことについても知らないことはないというところまで来ている。過去の世紀に於いては、“進歩思想”の人達は自分

以外の者、外国人、未知の人々への無理解が、戦争や紛糾の原因となる人種差別や、嫌悪の情をひき起こすと考えた。だが、現代社会ではどうであろうか？ 無理解、不信の念は減少するどころか増大する一方であり、戦いや不和は、静まるどころか世界のあちらこちらで発生している。相互扶助依存の必要性を認識する代わりに、皆が政府も国家もそれぞれ自分の利益の為に争い合っている。思うに、今、ここでこそ、禅への、仏教への真の理解が、国や人種の差別をこえて、人類を救うことになるのではないだろうか。

仏教は、盲人と象の話のように、私達の見解は常に相対的なものであり、限界があるという事を教えてくれる。絶対的判断を下すことはわれわれには不可能であり、絶対的に誤ったこと、正しいことはないといわれわれが気がつくに至つたら、多くの緊張状態が緩和され、互いを受容

する事ができるようになるだろう。一言でいうならば、寛容の世界に生きる事ができるようになろう。

一方、人皆多かれ少なかれ目を被うちりをかぶっているのだと心得て、自分自身の無知の結果苦しんだり、又他人を苦しませたりする事もあるのだと認識する事により、自分の生まれや知能から来る優越心など関係なく、他人をより一層の惻隱の情を持って眺める事ができるようになるだろう。

「エゴ」を失くそうと努め、少なくともエゴのもつ不自然な性格をみとめ、その貪欲なことを自覚したら、あらゆる人々の内に、仏性を見出すことができよう。何故ならば、未だ生まれぬ者、成らざる者、作られざる者、完成されざる者がいるのであり、(さもなければ)、生まれ、成長し、作られ、完成された者以外には、出口もないのだから……」



とにかく、仏陀、目覚めたる者は、四聖諦 (Nobles Verites) の初めに「一切は苦である」とわれわれの状況を明確に表明されている。確かに一体誰が「私は苦しみを知らないし、又決して知ることもない」といい切ることができるだろうか？ 人類の歴史の中で、一世紀たりとも、又一国たりとも苦しみから免れたことがあったらどうか？ 現代社会に於いて、幾人かの欲望の充足は多くの人々の貧困により支えられている。漠然とながら、私達は、少なくとも物質的には特典を与えられているとは解っている。そうはいうものの、あらゆる便利な品物に囲まれ、豊かで安楽に過ごしてはいても、その生活の中に苦しみはひそんでいる。誰であらうとも、何処にしようとも、人生は同じように展開するのだ。すなわち、誕生、苦しみ、病い、老いそして死という風に。

仏陀のあわれみは、この苦しみの世界の彼岸

へと私達を導いてくださるのだ。

誰にでも可能な道が、誰にでも開かれている、と彼は断言してくださっている。私達の努力次第なのである。その道に達した時、私達も又、「目覚めたる者」になれるのだ。道は時には長くつらい。しかし、長くてつらいと感じることの人生なんてあるだろうか？

私達は、私対彼等、日本人対西洋人、正対誤といった、苦しみをひき起こすあの勝手な対立を設けるのは止める事ができる。とはいえそれは先ず一つの犠牲を強いるのだ。すなわち、個人的見解をすて、選り分けることを中止し、世界を先入観を持って眺めることを止めねばならない。その為に、道元禪師は、一つの鍵を私達に与える。それは、彼の師によつて絶えずくり返された言葉であり、或る夜、坐禅の最中、突如、彼が会得したことである。「身心脱落」と。

私達、日本人であれ、西洋人であれ、私達の

体と精神を全く投げ棄てたら、何が残るだろうか？ 多分、禪の真理があり、あらゆる人々を思いやる、過去の判断力や教養から全く解き放たれた真の「私」であろう。それは、時間と空間を超えて、しかしながら今、ここに深く禪を組んで、呼吸法に集中している。富める者にも、貧しき者にも、老いも若きも苦しみを感じるように、自由とあわれみのメッセージも全ての人の耳に達し、体験され得るのだ。「坐禪を組む」とは、私達の本来の姿に戻ることである」

私にとって、禪との出会いは、先ず、坐禪との出会いであった。私が、この禪の教えの国際化で担える役割を述べる前に、今日までの私の歩みをお話するのをお許しいただきたい。

私はパリに住んで働いていたが、三十三歳の時、初めて坐禪を組んだのである。仏教と禪に関する本を読んだ私は、好奇心から、弟子丸師の築かれた道場に足を運んだ。やがて少しずつ、

この新しい人生の広がりについてウエイトを置きたいと思うようになっていった。長いこと迷った果てに、やっとしつかりと大地に足をつけられる場所に辿り着いたような思いだった。幾度か接心に参加し、僧侶とも会い、彼等の話を聴いているうちに、ほとんど無意識のうちに、フランスを出て、仕事をやめ、友と別れ寺院に生活し禪の知識を深めたいと決心するに至った。他の事は、これに比べれば少しも重要とは思われなかった。

東京で数カ月暮らしているうちに、坐禪三昧の質素な生活をしている小さな寺が山深くにあると知った。そこに私は三年前から寝起きし、私の師である森山老師の手で僧の許しを得た。

ところで、ここで、国際主義の命題を立証すると思われるので、「僧侶」の語源についてちょっと述べたいと思う。「僧侶」とはパーリー語では「ビク」と呼ばれ、物乞いをする者という意



味であり、日本語では出家、すなわち家を離れた者を意味する。この二つの言葉には、従って、所有権、財産の放棄といった観念がある。これは物質的な意味に止まらず、僧にはもはや、足の地面はなく、サンガ以外の共同体はなく、個人的な意見も私的生活も放棄した者なのである。

「道にさえぎられた地点に到達すると、完全なる光明がある。目覚めにふさがれた者の内には、完璧なる実現がある（行を迷中に立てて、証を覚前に獲る）」（学道用心集より）

私と日本の出会いは非常に強烈でありかつ困難をきたした。滞日一年目、新しい環境に順応しようとしている時、しばしば、次の疑問が頭に浮かんだ。どうして日本の文化と真の禪を区別するのか？ 答えはなかなか見付からなかった。私の知性を精一杯働かしては、分類したり比較したりしてみたが、ますます混乱するばかり

りであった。やがて、質問の仕方が悪いのだと気付いたが、満足のゆく形は見つからなかった。昨冬、老師は私を、禪センターを訪問するようにアメリカへ派遣してくださった。そこで、私は、二度目の文化ショックを受けたのである。

日本に馴れてしまっていた私が、新しい言語を話す、新しい考え方と新しい行動方法を有する、新しい社会環境に又一度置かれたのである。でも、日本人もアメリカ人もフランス人も、皆一緒になって、水と牛乳のようにまじり合い相和して「道」を歩む事ができたのである。一つの国、もう一つの国、二つの大洋、にもかかわらず共通する道を。

「谷のこだまは、その大きな声より生まれ山々の形はその真の姿以外の何物でもない」
「谿声は、便ち是れ広長舌、山色は、清浄身に非るはなし。
禪は抽象的な事柄で説明されるものではない。日々の生活であり、今私がいる場所なのだ。

禅は空气中で生き、米やパンと一緒にそしゃくされるものである。知的な作り物ではなく、現実そのものであり、私達の生活に、今、ここに生きているものなのだ。西洋社会は主知主義のもとにくず折れんばかりであり、人は皆うまい言いまわしを好み、それを理解しようとする。しかし、禅の境地には徹底的に捨てることなくしては至ることができないのだ。

そこで、私は、人々に、寺であれ庵であれ、一つの場所を提供し、この現実には立ち戻れる一時を与えることができたかと願うのだ。大学や学校で学ぶような言葉でではなく、自分自身に戻れる場所を、テレビを眺めながら又、他の事を考えながら食物を詰めこむのではなく、真に食べられる場所を、そして心安らかにぐっすり眠れる場所を。新しい知識を得るのではなく経験や学問によって得た事を全て忘れる機会を得る場所を、そして、終には、眼を水平にし、

鼻を垂直に、何ら特別のもののない世界を生き始められる場所を……

時間や空間を通して、菩薩の道を通った先人達に又、この人生で私と共にある人々に、心からの感謝の念をささげたい。それに、また、その為に、私は全ての人々とこの道程を頌ちあいたい。

もし私がフランスへ戻るとすれば、西洋社会に、ますます強く精神的源泉——全人類の共通の遺産である——の希求があるからであり、それに又、ダルマカーヤ（法身）は、常に何処にも偏在していると私が理解しているからである。こうして、般若心経の最後の言葉が実現するだろう。

「羯諦羯諦、往きて往きて彼岸に到達せよ皆うちそろいて……」

フランス語訳 小野けい子

（来春より南仏に禅堂を開単の予定です）

21世紀の仏教と私の役割

総合的な仏教研究をめざして

ロンドン大学留学中
名古屋大学大学院

森 雅 秀

物質主義と精神文化

日本人の平均寿命が女性は八十一歳を、男性は七十五歳を越え、いずれも世界一の地位をゆるぎないものにしたという。長寿という古来より人類が求めてきた理想のひとつが、現代では逆に「長寿社会」という言葉とともに、わが国がかかえる社会問題のひとつとして取り扱われ、「長寿必ずしも幸福ならず」という公式のもとで論じられるようになって久しい。そして、

その背景として先端医療技術の発達に比べた福祉政策のたちおくれが多くの場合指摘されるが、物質文化を偏重し、精神面の充実を軽視してきた現代文明そのものまで言及されることもしばしばである。

末期がん患者のように、死のみを待つ者への医療であるターミナルケアが論議されるのもこのような文脈においてである。

現代における、このような物質文化と精神文化との間の不均衡は、必ずしも老死といった特



殊な状況だけではなく、生活全般にわたって思
いだすことができる。また、日本ばかりではな
く、アメリカや多くの西欧諸国がかかえる問題
でもある。

これらの国々はいずれも高度に発達した工業
先進国であり、近代化、あるいは合理化の名の
もとにモノにあふれた豊かな社会を築いてきた
のであるが、その一方で、伝統的な価値観を失
ってきたことも見逃してはならない。

このような従来 of 価値観の喪失は国民ひとり
ひとりのアイデンティティの喪失へとつなが
り、その反動として、しばしば極端なナショナ
リズムへと走るものも現れる。また、皮肉なこ
とに、徹底して合理的な精神を追求したこれら
の近代国家が、非合理的なものともいえる宗教
を決して放逐しなかったことは、宗教ブームと
言われるほどに新興宗教が隆盛をほこる現代の
日本を見ても明らかである。特に若者を中心と
して呪術やオカルトといった超自然的なものへ
のあこがれが強くみられることは、多くのジャ
ーナリズムが報ずるところであり、肥大化した
現代社会を前にして、自らのアイデンティティ

を模索する彼らの当然の帰結ともいえよう。

このような状況にあつて、精神面において伝統的な価値観の一部を形成してきた仏教にも、おのずと変容が現れる。特に日本仏教の場合、伝統の変容は民衆の信仰と仏教との間の乖離に認められる。

従来、日本仏教は日本人固有の宗教的な感情ともいえる祖先崇拜と結びつくことによつて民衆宗教たり得てきたが、この結びつきの度合は近年ますます大きくなり、逆に民衆宗教としての性格を失おうとしている。伝統的な寺院のほとんどが葬式や法事など、死にまつわる儀式にいたずらに莊嚴さを求めるばかりで、一般民衆の生活レベルの真摯な信仰との間の溝は深まる一方である。

民衆の仏教における伝統の変容、もしくは喪失は筆者が研究の対象のひとつとしているネパールやチベットの仏教においても顕著である。

ネパール仏教がインドの大乗仏教の伝統を受け継ぎ、独自の仏教を形成してきたことはあまり知られていないが、首都カトマンドウを中心とするカトマンドウ盆地には、今なお多くの仏教徒たちが住んでいる。しかし、急速な都市化の波はこのヒマラヤの美しい町にも押し寄せ、周囲の農村や山村からの膨大な人口の流入は、正常な都市としての機能を完全に奪つてしまつている。仏教美術の宝庫であつた多くの寺院の荒廃は進む一方であり、また、先進諸国からやつてきて土産物を買ひあさる観光客の群れは、金銭目当ての盗難にさらに拍車をかけた。

環境の悪化は従来 of 伝統の喪失に容易に結びつく。寺院に安置するための仏像や、尊像を作ることでできる仏師の数は激減し、伝統的な儀礼を正しく遂行できる僧侶は数えるほどしかない。後継者不足に悩むネパール仏教が、これから数年の間に大きな変化を遂げることは間違

いないであろう。

現代仏教への正しい認識

一方、国家としての基盤をすでに失ってしまったチベットの場合、この問題はさらに深刻である。

一九五九年のチベット動乱にともない、僧侶を中心に多くのチベット人が国外に亡命し、これが日本を含めた多くのチベット学の発展に大きく貢献したことは確かであるが、信仰の対象としてのチベット仏教を考えた場合、社会との結びつきを断ち切られたという事実は決定的である。

現在ダラムサラをはじめとするインド各地のキャンプや、アメリカ、ヨーロッパ諸国においてかなりの数のチベット人が従来の伝統の保持につとめているが、異なった環境のもとで動乱以前のチベット本土での僧院生活を再現する

ことはもはや不可能である。

昨今、開放化政策にともない、中国内部でもチベット仏教寺院がいくつか復興されたと聞かがあるであろうし、また、中国自身も急速な近代化を進める現在、日本仏教やネパール仏教が通ってきた道をチベット仏教がたどらないとは断言できない。

このような従来の伝統の急激な変容という、現代社会のかかえる大きな問題が仏教にもおよぶなか、われわれ仏教研究者はどのような態度をとるべきであろうか。筆者は安易な復古主義や懐古主義にくみしようとは思わない。

また、極端な仏教改革運動に参加するつもりもない。筆者は日本を含むアジアの現代の仏教を徹底的に「知る」ことを望んでいる。このような態度は、単なる傍観と非難されるかもしれないが、めまぐるしい勢いで社会が変化し、わ

ずかな将来さえ予測することのできない現在、現代の仏教がかかえるさまざまな問題点を知ることなしには、きたるべき将来の仏教の形成に参与することはできないのではないであろうか。

それでは「徹底的に知る」とはいかなる方法でなし得るのか。筆者は、仏教を単なる教理の体系系とはせず、文化の巨大な複合体とみなし、これに対しさまざまな分野からの総合的な研究が必要であると考えている。従来の仏教研究は、経典や論書などにもとづいた文献学的あるいは歴史学的な考察が主流を占めていた。

このような方法は過去のさまざまな仏教を個別的な解明をすることには大きな成果をあげてきたが、専門分野の細分化は一方で各研究者をいわば袋小路に追い込んでしまったのも事実である。

このような現状を打破するためには、従来の



専門領域の枠組みを越えた学際的な仏教研究が必要である。

特に現代の仏教理解には、社会学、人類学、民族学、宗教学といった分野との共同作業が有効であろう。また、総合的な視座において仏教の研究を進めるためには、地域や時代に関するこれまでの枠組みをいったんはずす必要もでてくる。

すなわち、南アジア、あるいは東アジアの宗教としての仏教を、より長い時代の中での文化現象としてとらえる視点が要請されよう。さらに、これまで自明のこととして受け入れられてきた大乘仏教、小乗仏教、あるいはインド仏教、中国仏教といった分類法にも疑問がとなえられるかもしれない。

現代の仏教をとりまく状況は、筆者がこれまで勢力的に研究を進めてきた十一、十二世紀のインドの仏教を想起させる。当時の仏教は、国

家の保護をうけて教義の面では著しい発達を遂げたが、その哲学的な高邁さがかえって一般の民衆の離反を招き、それをくいとめるために儀礼や美術などの面でヒンドゥー教との融合をすすめていった。

結局、このことが仏教から独自性を奪い、ちようどこのころ激しくなってきたイスラム教徒の侵込ともあいまって、自らを生んだインドの地から仏教は姿を消すことになる。当時の仏教徒たちの轍を踏まないために、われわれは現代の仏教を理解しなくてはならない。

その一方で、この時代をはじめとする過去の仏教に関しても同様の総合的な研究を行うことは、現代の仏教を知るうえで大きな示唆を与えてくれるであろう。

なぜなら、過去はいつでも偉大な教師なのであるから。

良寛様の生き方から思い付いたこと

第三期留学生

李

(中) 幼麟
(国)

花無心招蝶、蝶無心尋花、花開時蝶来、蝶来时花開、吾亦不知人、人亦不知吾、不知従帝則

このわずか七行の詩に、良寛様の思想・生き方などが集約されている。

花と蝶がたがいに無心であって調和が保たれているように、私もまた他人のことを知ろうとはしない。ただ知らず識らずのうちに、天の摂理に則って生きていくばかりだ。このように「人生いかに生くべきか」という深遠なテーマをわずか七句で、またおよそ「人生いかに生くべきか」などの関係のありそうもない花と蝶の比喻

を用いて、この深遠なるテーマをさらりと説いた良寛様に、私は限りなく尊敬を感じた。良寛様は、ご周知の通り、出雲崎町に生まれ、育ったのである。在世当時はそれほど人々に知られていない。それは一体なぜか。私は、他ならぬ、良寛様の生き方に起因すると思っている。良寛様の姿勢を一言で言うなら、他からの評価を問題にせず、自己の信念に基づいて生きるということなのである。これはあらゆる感情を持った人間にはたやすくできることではない。良寛様はある意味での超人である。自然の摂理に

従って生きているだけだと言うであろう。

では、一体、人間の生きる原動力になつてゐるものはないか。すべてがそうだとはいわれないが、その大半は「欲望」ということであろう。

例えば、自分がここまで努力したのは、世間において名声を得たい。地位がほしいからというのが本音ではないだろうか。いかに人より優位に立つかと、四六時中、他人を意識して生きてゐる。「二六時中、己れを意識を以て充滿す。故に二六時中太平の時なし」と夏目漱石氏が言っているように、私たちはいつも殺伐とした世の中に生きてゐるのである。

人が出世したから自分もそれ以上に出世しなければならぬと思う。さて、ここでうまいぐあいに希望が叶つたとする。人は一時、幸福を味わうであろう。しかし、それもつかの間、また自分よりも高い地位にある人に気づく。人はまた、それを越えようと必死になる。結局、人

は限りなく最高の幸福を求め続けるのである。

たとえ、この世で言う“最高”の“幸福”が運よく得られたとしても、これが人間にとつて眞の幸福と言えるだろうか。たえず人や己を意識しつつ生きるのが、人間としての生き方なのであるか。

人間の眞の生き方とは、また、眞の幸福とは、人それぞれが自己の独自性を守つて、それぞれが自分に適したそれぞれの人生の道をつき進んで行くことなのである。

正直言つていままで私だつて日本留学に来て、よい成績で無事に学業を終え、学位をもらつてハクをつけ帰国するという考えがあつたのである。純粹な学問精神は果たしてどれぐらい持つていただろう。

良寛様はそうした俗な考えを非常に嫌つた。血のにじむ努力、修行をするのは、自分の悟り、眞理を得るためであつて、そこには、世俗的欲

其象一に旗

勿なほ空そら一に陣じん

一越こ不ふ氏うぢ一ひ

良寛の書

【よみ】正月の旗を邀まかうるなく、堂々の陣を撃うつ勿なほれ

「良寛の書」第二卷より

望はみじんもない。

花は蝶を待つて花を開くのでなく、蝶は花が咲いたからと言って飛んでくるのでもない。花や蝶はそんな思惑などらわれずに、それが自然の営みにつながっている。なのに、なぜ人間だけがあくせくと、花や蝶のように無心に自分の務めだけを果たしているわけにはいかないのだろうか。

この詩について言えば、花と蝶、自分と他人のあり方は、自然の摂理であり、その自然の摂理、「帝則」に従う事が大切であるとするのだ。また、ここでは、何の思惑もない「無心」を主調としている。

こうした生き方をした良寛様であるから崇高な心であることを強調し、また、墮落というのは、自分との妥協とみなし、激しくこれを嫌ったのである。

この良寛様の、世間、為政者を意識せず、自

然の摂理に従い、自己の信念に基づき、崇高なものを書きわめるというのは、人間のほんとうの生き方にも言えることである。

良寛様のこうした生き方を、他人は「如愚如魯」と評したりしたが、私はそうではないと思う。あれだけの人格、教養、学識を持ちながら、世に出ることもせず、そうした心を欲と考え、自己の確信した道のりを行く、という最も純粹、自然な人だった。

ともあれ、自身の思想をその生涯をつらぬき通した良寛様である。良寛様に巡り会っただけでも私の日本留学の価値があったし、また、とても及ばぬにしても、その姿勢を少しでも学び、自分だけいい生活さえできればいい、「手段を選ばず」を人生の最高追求目標にしている一部の中国の同胞たちに、少しでも良寛様の生き方をわかってほしいと思う。

第六回海外留学僧募集について

目的 大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類 (1) 保証人と連署した願書 (4) 卒業証明書

(2) 卒業証明書(写し) (5) 推薦書

(3) 履歴書 (6) 論文

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割 ● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと ● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿メ切 昭和六十四年十二月二十五日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

さよならの箱

山本 瓊子

さよならの箱が あったらいいね

ちいさな箱が あったらいいね

きょうの けんかは

さようなら

こぼした なみだも

さようなら

心のいたむ 思い出は

ひとつ ひとつ 箱にしまって

バラの しげみなどに

かくして おけたら ほんとにいいね

目につく ほくろと

ちぢれた毛

まんまる ほっぺに e t c ……

さよならの箱は あふれてしまいう

さよならの箱が あったらいいね
ちいさな箱が あったらいいね
わすれた 宿題

さようなら

三時間目は

さようなら

はずかしい 出来ごとは

いそいで いそいで 箱にしまって

砂場に 深く

かくしておけたら ほんとにいいね

詩集 透明な二月の少年より



善光寺だより

● 第三回日仏セミナー 善光寺参拝

昨年パリで行われた日仏セミナー



レオン・ヴァンテルメルシュ先生

ーが第三回を数える今年は、日本で開催されました。

昨年の方丈の論文発表を傾聴された学会の方々が、十月二日ござつて善光寺に拝登され、記念のお茶会が催されました。

またその折、パリ大学高等研究院大学教授のレオン・ヴァンテルメルシュ先生と、上智大学アジア文化研究所長の石澤良昭教授に、海外留学僧派遣育英会の顧問としてお迎えすることを承諾いただき、認定式も併せて行われました。

● 育英会顧問に就任

四月一日をもって、アメリカの仏教学者であられる三名の方が、海外留学僧派遣育英会の顧問に就任されました。

ピーター・N・グレゴリー博士
イリノイ大学教授

カール・ビーレフェルト博士
スタンフォード大学教授
ロバート・M・ギメロ博士
アリゾナ大学教授

● 育英生として承認

アメリカ・ニューヨークの禅センターを手伝っている越石哲英君を、檀家代表の育英生として承認することを決め、今後の活躍に期待しています。

● ロータークラブで講演

横浜港南ロータリークラブ（原功会長）より講師として招かれた当山住職は、八月十七日、「国際交流と育英会」というテーマで講演をしました。

未来の光あるいしづえを求める
ロタリーアン各位は、素晴らしい聴
衆だったようです。

●交換留学生滞在

鶴見女子高等学校の交換留学生
としてハワイから来日していた、
女子高校生2名が、三週間の日程
で万蔵寺と善光寺に滞在しまし
た。その間、京都・奈良を見学し
たり、買物をしたりと日本の素晴
しさを満喫して、無事帰国しまし
た。

●結婚しました。

第一回留学僧としてタイに学
び、現在活躍中の梅田尚平師が、
十一月六日、大阪府立労働センタ
ーで結婚式を挙げられました。

新婦裕美さんという素晴らしい

伴侶を得て、今後益々大きく羽ば
たいてくださることを祈ります。

ご寄付御礼

相馬 和子殿	一万円	越前 竹子殿	五千元
三村 佛天殿(長松寺)	三万円	池野 清治殿	五千元
滝沢 孝子殿	一万円	山口 義男殿	三十万円
阿久津経之殿	七万円	武井 忠興殿	一万円
辛島 武美殿	三万円	中央典礼殿	三万円
ロータークラブ殿	二万円	広田 耕作殿	五千元
日の出屋石材店殿	二万円	大沼崑千代殿	五千元
香最 寺殿	三万円	石山千佳子殿	一万円
東 隆真殿	二万円	柿沼 俊一殿	三万円
崇 素明殿	五万円	千葉 弘子殿	五万円
中野 良教殿	一万円	遠藤 清勇殿	十万円
岩波 道俊殿	二万円	△成寿賛助▽	
高橋 章殿	五万円	大道 晃仙殿	二万円
梅の 木殿	一万円	長国寺殿(岐阜県)	一万円
		永林 寺殿	一万円
		面川 晴治殿	一万円
		神田 茂殿	一万円
		柿沼 俊一殿	二万円

● 読者からのお便り

拝啓、秋酣の候となりました。
扱て方丈様のテレビ拝見しました。
感銘多大です。国境を越え民族を越えていわゆる偉大なる方丈様の檀家の一員である事が有難いです。以上申し上げてご挨拶とします。

横浜市南区 大場 貞蔵

善光寺が国際的な交流の場として重要な役目を果たしつつあることに、卒直に感嘆の念を禁じ得ません。これが着実に実績として重ねられ、発展していきましたら、日本仏教は世界の舞台に於て、善光寺というユニークな寺院活動を通じて、その現代的展開を歴史的に評価されることになるかと信じます。

今般は立派な仏像を御贈り下さいまして、有難く拝受いたしました。私などは在家の出身であり、幼い頃も

何ら宗教的環境に育ったわけではありません。それが長じて、このように仏教の世界へと導かれたのは、よほど宿縁のうながしと思わざるを得ないものがあります。日常の生活の中で仏様に手を合わせたり香を焚いたりする行為が、人の内なる仏心を目覚めさせるということには必ずあるものと信じておりますが、そうしたことをますます確信できる人との出会い、御縁をわが身に頂けますことを深く感謝する次第です。

東京都北区 形山 俊彦

本日は「アメリカの禅見聞記」をお送り下さいましてありがとうございます。陽光寺境内を歩く黒田様、仏真寺におすわりになっている黒田様の御立派なお姿、そのうえ前角老師というお兄様が居られる事、すばらしいお話にびつくり致しました。昔、明美がお父様の御立派なお姿と、

四・五人のお供がついて出てこられてびつくりしたことをききましたが、やはり御兄弟の皆様はお父様の血すぢを引つがれて居られるのですね。不動院のお坊様が明美の踊りを見て、感心して下さいました。私もこんなことではだめだ、もっともっとすべてに研究しなくてはならないと思いました。仏門の世界とは本当に修行に修行を重ねる精進の世界なのです。私は一生を床屋の世界で通してきました。娘は踊りの世界、大金は書の世界それも墓石に残される書の世界、紺屋様はあいごめの世界、そして黒田様は佛門の世界、それぞれ世界は違っても自分の力いっばいがんばってきた事は立派な生きがいだと思います。益々の御進歩をかげながらお祈りしております。

東京都練馬区 大金きよみ

拝啓 今年は例年になく雨の多い夏、

海も山も人の出が少なかつたようです。夏休みもすぎ学校も始まり、二百十日もすぎほっとしております。

先生ご一家皆様で健勝のこととお慶び申し上げます。私、信松院の門前に住んでおります。信でございませす。先生がご指導に來られた一年間親子で大変お世話になりました。

お礼の挨拶もせず今日まで来てしまつた事、どうぞお許し下さい。まづは私どもの近況をお伝え致します。私は(働)榮楽パンに勤め40年にならんとしております。妻は近くの縫製工場にパートとして働いております。そして子供達、(長男は死去)次男恒樹は都立東高校を卒業し浪人一年、今年、国立東京工業大学に合格し、在学、長女陽子は都立第二商業高校情報処理科三年在学、お蔭で皆元気に過しております。

今が有るのは親子をろつて寺に足を運び時をすごした事が大変よかつ

たのではないかと思ひます。禪、写経、読経みんなで行い、忍耐、集中心を少なくとも自分のものにしたのではないかと信じております。ありがたく感謝致しております。信松院はもとより昼間先生にも「ともしび、自灯明、法灯明」のご本まで戴き一方ならぬお世話になっております。

先日昼間先生の宅にお邪魔した際、先生のご本を拝見し善光寺としてお子様方の衣姿のお写真を見て感動致しました。私どもも頑張つて一日一日を大切に過すよう努力致すつもりです。息子が大岡山まで通学しておりますのでいつの日か善光寺さんのお参りをしたいと思つております。私の心境として今こう思つております。

城作り 子らが学ぶも

公の 力 かりたる
我が家族 いつかはせねば
恩がえし

と思ひ子供らに言い聞かせております。
東京都八王子市 糠信 義男

前略 この度は方丈様のテレビご出演の録画を出張から帰つて昨夜拝見いたしました。深い感動を受けました。正に方丈様の面目躍如としたお姿があり、そこから体全体での教えをうけ、又親としての深いきずなを感じ、厳然と現在に生きる大いなる指導者を拝見いたしました。例え建て前論者にはどううつろうと一切かまわず、ひたすら生きるお姿を拝見しうれしくなりました。

形だけつくり目先に生きる人々の多い昨今うんざりしている矢先、正に清涼の想いを頂戴できまして誠にありがとうございました。

これからも一層ご健勝にて我等凡人をご指導下さいますよう心から御願い申し上げます。

東京都中野区 中村 正信

拝啓晩秋の候、先生におかれましては、益々御健勝のこととお喜び申し上げます。幾通もお手紙をいただき、本当にありがとうございます。御返事が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。おかげさまで妻ともども元気にいたしております。こちらの暮らしにもやっと慣れてまいりました。

大学は今月から始まりましたが、予定通りPhDコースに登録することができました。ただし正式にはMphilというコースです。と申しませぬのは、東洋アフリカ学院(SOAS)を含むロンドン大学の規則で、すべてのPhDの学生は、はじめにMphilとして登録し、一年後に指導教官の判断でPhDのコースに切り換えることになっているからです。指導教官のスコルプスキー先生の指示に従い、授業は先生のクラスに週二回出席し、残りの時間はすべて自分の論

文にあてております。PhD論文には、こちらの希望していました通り、Vajnavaliという12世紀にインドで著された密教儀礼に関する文献を扱うことになりました。テキストの英訳とサンスクリットとチベット訳の校訂テキストが論文の中心になると思います。そして、個人指導の時間として毎週一回、テキストを読む時間を作っていただけました。一般にはPhDの学生の個人指導は、せいぜい二週間に一度と聞いておりますので、これは異例のことのようです。

以前にも御報告したかと思いますが、宿舎が大学から徒歩で20分位のところなので、授業のない日も大学の図書館に通っております。また、大学の図書館にない文献や写本を見るために、ロンドン市内にあるインド政庁図書館 (Indian Office Library) や王立アジア協会 (Royal Asiatic Society) にも時々出かけ

おります。こちらにまいりましてから知ったことなのですが、これらの機関や、少し足をのびしたオックスフォードやケンブリッジの図書館には、前世紀にネパールやインドで収集されたサンスクリットの写本がかなり所蔵されており、私の専門とする密教関係の典籍もその中に多く含まれています。あらためて、この国の東洋学の歴史を思い知らされた次第です。こちらにいる間に、少しでもその伝統の一端に触れることができればと思っております。

今年の関東地方は天候が不順と聞いております。くれぐれもおからだをお大事にお過ごし下さいますようお願いいたします。簡単ではありませんが近況の御報告をさせていただきますました。

森 雅秀拝

Do Not Neglect to Make Determination

Ardent with the grand vow that might have appeared incommensurate with my station, I established on January 15, 1984, the Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad. It sent its first scholars, priests Tanaka and Umeda, to Watt Pa-knam, Thailand, in the following year. Since then to date, truly, I have never been free of the feeling as if treading on a thin spread of ice. I cannot be too grateful to the supporters of this Temple Who backed my vow by saving one mouthful of their daily meals.

On August 23 this year, the Scholarship Society had its Third General Meeting, where the above-mentioned priest Umeda said, "At the First General Meeting, we two were the only attendants, so I felt rather forlorn, but now, at this Third General Meeting, much more of us are here and I feel encouraged". As he exactly commented, we could fortunately report then that throughout the period covering the three Meetings, we have sent a total of 17 priestly students to 8 countries abroad. The newspaper Chugai Nippo, in its columns under the title of

“Highly appreciated even by believers in other religions”. appreciatively commented the significance of the Third General Meeting of the Scholarship Society.

Three days after the closure of the General Meeting. I and Rev. Sato left Japan for the United States. In Los Angeles, I visited the Zen Center and met Mr. Iwanami who had been devoting himself in high spirits to seek after truth together with more than 60 ascetic trainees from 14 countries. After then, in New York, I handed a written appointment to Mr. Koshiishi who had been practicing under Rev. Robert Grassman Tetsugen who is one of the distinguished disciples of Rev. Maezumi. I could not meet Mr. Shimazaki because he had been to Poland accompanying Rev. Donnis Mertz Genpo who is a disciple to Rev. Tetsugen. Throughout this tour, I was much more impressed by the necessity of developing human resources, and I am deeply determined to further devote myself to this task.

May every living being go through a life, a death, and a rebirth to hear true teachings. May everyone, when hearing true teachings, do not doubt but believe in them. When we meet true teachings,

we will prefer to accept the teachings of Buddha, disregarding other evil religions in the world. We then will go through to the end of the Buddhist's path.

When you are so determined, you will have a clue to the true Buddhism. Do not neglect to make the determination.

('Voices of Ravines and Colors of Mountains' in "Shobo Genzo")



編集後記

▼前号でお伝えした、上座部得度式の折、タイから来日されたワット・パクナムの副住職様が、バンコク市内に入院されておりました。

ワット・パクナムにおいては、日本語をお話しになる唯一の方で、善光寺の留学僧のみならず、長年日本人僧の力強い支えになってこられた大切な方でもあり、住職夫妻はとり急ぎお見舞いに渡タイしました。幸いなことに、現在では日々快方に向かつておられるとのことで、関係者一同、安堵されております。私たちも、副住職さまの一日も早い完全快癒を心からお祈りしたいと思えます。

▼海外留学僧派遣育英会の留学僧五名の入選論文を掲載しました。

この論文はすでに、中外日報や「宗教と現代」誌上でも取り上げられており、内外からの評価の高いことの証左でもありましょう。

第四期留学僧各位は、それぞれの修行地で、すでに安居・勉強に励んでおられます。今後のご活躍を見守って参りましょう。

▼八月二十六日から一週間の日程で、黒田住職と海外留学僧派遣育英会常任理事の佐藤俊明老師がアメリカのロサンゼルスを訪問しました。

これは、ロサンゼルス禅センターの前角老師からの招聘によるもので、現地での法戦式に臨席するためでした。この折になされた佐藤俊明

老師の「提唱」はアメリカで禅を学び修行する人々に大きな感銘を与えました。詳細については、次号で特集を組む予定です。ご期待ください。

▼まさか？と思つて暦を見ると、今年も残すところひと月あまり。青空はどこへ行つてしまったのかと、うらみがましく空を見上げたあの短い夏への繰り言を、ついきのうまで言っていたのに……。物でも時でも、残り少なくなつて初めてその減り方の激しさにガク然とします。(小熊)

成寿 第十一号

昭和六十三年十二月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局



乙女かんのん

丸い両手を合わせ
あお向いたあどけなさ
私にもこんな日があつたつけ
風の声も花の歌声も
小鳥の語る旅の話も
素直にきけた日
そつと拝めば
昔の日に帰してくれる
汚れ知らぬ乙女かんのん
乙女姉妹にきざまれて
ひそと草かげに身をよせる
路の行き帰りに
どうしてもただずまずに居られない
ひきよせられぬかづけば
清められ慰められて



横濱善光寺